

5 詳細調査報告⑤ 南風原町字津嘉山

【行事名・開催日・開催場所】

津嘉山棒術の調査を2024(令和六)年7月27日土曜日に開催された大綱曳きと9月28日の聞き取りで行った。津嘉山の綱曳きは、アミシの御願(旧暦6月26日)として毎年行われる御願綱と、10年に一度行われるウーンナ(大綱曳き)がある。今回は、コロナの影響などで開催が遅れ2003年以来の21年ぶりウーンナが開催された。大綱曳きの年は、旗頭やカナチ棒などあきでは東西から雄雌の対峙を象徴する3人の支度が特別な装いで登場する。その支度を竹を組み合わせて作られたチナブと呼ばれる台に乗せ綱寄せの際に東、西両端から中央のカナチグチへ寄せてくる。その際、チナブを、六尺棒を用いて数十名の人数で高く支え上げる。通常の綱曳きは旧暦日に当てて行うが、ウーンナの開催時期について旧暦6月26日直後の日曜日に設定している。

【関連祭祀儀礼】

ウーンナでは、琉球王府からの御拝領旗が東西1旗ずつ、二番旗、王府直伝の鉦鼓隊がスネーイ(行列)を先導し、東はノロ殿内、西は大屋から会場を目指して歩む。その際、女性陣は臼太鼓やティサージ(手巾)、男性陣は棒持人として六尺棒を持って参加する。旗頭の旗持ち人が入れ替わる際に、棒持人らが棒と棒をカチカチ接触させながら、旗の周囲をグーヤマチで渦巻き状に駆け回り氣勢をあげる。さらに会場内で旗頭が所定の場所につくと、全ての棒持人がカナチグチ周辺で渦巻き状に駆け巡り氣勢をあげる。綱曳き勝敗が決し落ち着いた頃、東西別々に綱曳き棒が演武される。津嘉山では、綱曳き以外の行事として旧暦8月15日の字行事がある。昭和から現在までに4回しか行っていない大遊びでは組踊や狂言、舞踊、棒術や舞方も含まれる。大規模なため実施回数が少ない。十五夜遊びや村遊びと称し、規模を縮小させた行事を毎年開催している。現在では、民俗芸能保存会が主体となり実施されており、旧暦行事から時期を外して10月以降に開催日を設け、地域住民の親睦を目的に実施している。その中で、棒術や舞方の演武が披露される。

【棒の材料と演武(舞)の種類】

棒は桤材で、六尺棒、三尺棒、四・五尺棒を使用しており、六尺棒について以前は公民館でまとめて購入し個人へ販売していたが、現在は各自で購入し保管している。三尺棒、四・五尺棒は公民館で所有している。大別して棒(ボウ)、遊び棒(アシビボウ)、綱曳き棒(チナヒチボウ)、舞方(メーカタ)がある。津嘉山には13種類の演目があり、組棒では演目によって棒の長さが異なる。演目の種類は以下のとおりである。①西の綱曳棒(六尺×六尺)②西の綱曳棒(六尺×三尺)③東の綱曳棒(六尺×六尺)④東の綱曳棒(六尺×三尺)⑤綱曳棒(三尺×六尺)⑥又吉小棒(六尺×六尺)⑦ヌバル棒(六尺×六尺)⑧三月三日(六尺×六尺)⑨ミーハナヌチ(目鼻抜ち)(六尺×六尺)⑩三人棒(六尺×四・五尺×四・五尺)⑪左舞方⑫中舞方(奥の手くずし)⑬右舞方である。棒術の際の演奏は、銅鑼鐘(1名)、指笛(1名)である。舞方の際は、三線(2～3名)、箏、胡弓、笛、太鼓が各1名ずつで行っている。舞方棒は、棒術を舞踊化したもので棒の威力によって災厄や悪霊を祓い舞台を清めるために演じる。津嘉山の舞方棒には様式があり、昭和3年の「大遊び」では、座開きに「左舞方」、中締めに「奥の手くずし」、結びに「右舞方」を演じた。いずれも独特な技法をもっておりテンポを早めれば、実戦的な棒術ともなり昔は門外不出とされていた。奥の手くずしについては、実践棒の要素が多く、棒は逆手で棒を3等分した部分を持つ。四方へ進退して技を繰り出すが、特に後半では歌の切り返し以後に変化技をみせる。左右の手が打ち・受け・突き・払い等の技を持ち、右足を軸に受けの態勢で4分の3周、右へ転回して攻撃体勢を取るなど、股を大きく開いて腰を落としての左右への払い技、片足を前方へ伸ばして腰を深く落としての受けの構えなどの特徴があつて目が放せない。奥の手くずしの由来は、その昔、筑登之ペーチンと呼ばれ首里城勤めをしていた津嘉山の先達が首里士族か

ら習い受けたもので、「大遊び」や「十五夜遊び」で継承されてきたものである。字津嘉山に伝わるヌバル棒、三月三日、ミーハナヌチ、又吉小棒、三人棒は「綱曳き棒」に対して「遊び棒」といわれ、旧暦の8月15日の「十五夜遊び」のときに巻棒のときに演じられた。津嘉山の棒の特徴は、手数は少ないがクファミ（力強さ）を感じさせる所にあるといわれている。また、遊び棒と綱曳き棒の違いは、棒をカチカチと合わすのが遊び棒に対し、合わさないのが綱曳き棒である。

舞方棒の歌詞（曲：かぎやで風節）

左舞方：根の張りや巖 身は龍のごとに ことぶきや千歳 子孫そろて

奥の手くずし（中舞方）：根の張りや巖 身は龍のごとに ことぶきや千歳 子孫そろて

右舞方：常盤なる松の 変わること無さめ いつも春くれば 色どまさる

衣裳は、上は白胴衣（特製）、下は空手着ズボン紫サージ、紫タスキ、紫帯、白黒脚絆（綱曳の際、東は白黒脚絆、西は赤白脚絆を着用）。舞方は、上は白胴衣（特製）、下は空手着ズボン黒タスキ、黒帯、白サージ（前結び）、白黒脚絆を着用する。

【由緒・来歴】

綱曳き・ウンナー（大綱曳き）、綱曳きの勝敗が決まると同時に綱を片付け旗頭を鼓舞し、その後に棒術が行われていた。また棒術の役割として各陣の氣勢付けに演武される。ウンナーの際は、支度を載せる台チナブを六尺棒で支えあげる。毎年行われる御願綱では、東西の綱を寄せる際に六尺棒で高く支えあげる。大遊び、十五夜、村あしびにおける開幕舞踊として舞方の演舞があり、舞台演目の中で組棒が披露される。

【棒演武・組織の構成員】

津嘉山民俗芸能保存会（9部会）その中に棒術部会がある。綱曳きなどの行事においては、その都度実行委員会を結成する。

【練習状況】

戦後直後は、字内の棒術指導者の自宅庭にて行っていた。現在は公民館にて、行事の1か月前から週2回ほど行っている。

【コロナ感染症等をはじめ行事継承の今日的課題】

子どもたちの後継者育成に注力したい。地域内にある学童とも連携し、棒術を学童の教材に取り入れる取り組みも行った。

【引用文献】

- ・『津嘉山大綱曳き』（津嘉山大綱曳き実行委員会）
- ・『津嘉山大綱曳き解散総会』資料（津嘉山大綱曳き実行委員会）
- ・『組踊復活大あしび』記録集（組踊復活「大あしび」実行委員会）



写真3-3-20 又吉小棒



写真3-3-21 ヌバル棒



写真3-3-22 左舞方



写真3-3-23 大綱曳き支度台のチナブを支える棒持人



写真3-3-24 西の綱曳棒

著：神谷 武史

6 詳細調査報告⑥ 豊見城市高安竈ゴウ祭

【行事名・開催日・開催場所】

今回の高安竈ゴウ祭は、令和6年9月11日（旧暦8月9日）午前9時から開催された。ちなみに高安自治会ではそれ以前から、竈・道具の総点検をおこなったり（5月27日）、棒術等の全体練習をスタートさせたり（7月15日）、予行演習やガンヤー・シーシ・公民館周辺清掃をおこなうなど（9月8日）、12年ぶりの竈ゴウ祭に向けて入念な準備をおこなっている〔平田編2024：2〕。竈ゴウ祭当日、午前8時の時点で、高安公民館前の広場では、広場を取り囲むようにテントが張られていた。竈を安置したり道ズネーの出発地点となったりするメイン会場はこの広場であるが、後述するように、竈ゴウ祭の間中に集落内の様々な場所でウガンや棒術やガーエーがおこなわれるため、実質的には集落全てが会場とも言える。

【関連祭祀儀礼】

竈ゴウ祭当日の午前9時頃、供物（膳）が公民館に届けられる。それを受け取ると自治会長と顧問、当役が自動車に乗り込む。字豊見城の上原家（屋号沢岬）を拝むためである。上原家では、一番座と二番座の神棚に供物を供えて拝むという〔豊見城村教委員会文化課編2001：16〕。区長たちが上原家に行っている間、字高安の門中の代表が公民館を訪れて供物を受け取る。そして各門中の代表はそれぞれの門中墓を拝んで、竈ゴウ祭をおこなう報告をおこなった。

10時頃になると、副会長と顧問、当役ならびに青年たち十数人で、竈が納められているガンヤー（竈屋）へ向かう。竈のウンチケー（お迎え）をするためである。ガンヤーは集落の南東側、歩いて5分ほどの場所に置かれている。現在のガンヤーは2001年に改築され、コンクリート製の壁と赤瓦の屋根、木製の扉で出来ている。ガンヤーの扉の前に供物の膳（豆腐、三枚肉、酒）と線香を供えて、一同で拝む。この時、もう1組の役員たちがシーシヌメー（獅子様）に行って拝む。シーシヌメーはガンヤー北側、高さ十数メートルほどの高台に置かれた陶製の獅子で、顔はガンヤーに向いているという。それからガンヤーの扉を開いて竈を取り出す。青年達が竈を担いで、公民館まで運んでいく。公民館に到着すると、竈をテントの下に運び入れ、マクと呼ばれる木の台座の上に下ろす。

運ばれてきた竈は、ガンヤーに納めるために、コンパクトな保管状態になっている。これからそれを正式な竈の形に組み替えるのである。竈の屋根を外して、中に納められていた戸板や屋根飾り、欄干などを取り出して、組み見上げていく。完成すると、左右の戸板に蓮の花、前後の戸板に僧侶が描かれ、金色と螺鈿の屋根飾りをもつ美しい姿となる。竈の組み立てと並行して、ティンゲー（天蓋）の組み立てもおこなわれる。ティンゲーは長い竹竿の先に龍頭がついた物で、さらにその名の通り天幕が吊り下げられている。道ズネー（後述）の際には、ティンゲーが行列の先頭を歩く。竈が完成すると、竈の前に供物が並べられる。供物は、の一饅頭、豚のチラガーと肝、米、赤飯、泡盛である。その他、茶碗、和紙、硯、筆も並べられる（写真3-3-25）。そして自治会長以下役員数人がその前に座り、竈に向かって手を合わせて拝む。

その後、昼休みを挟んで、14時に竈ゴウ祭が始まる。最初に、棒士（男性自治会員）が、公民の広場でヘーイ棒を披露する。竈ゴウ祭に参加する棒士たちは4つの班に分けられていて、それぞれの班ごとにヘーイ棒を披露する。ヘーイ棒が終わると、今度は個人棒が披露される（1回）。最後にはヤイ・ナギナタが披露される（1回）。

棒術の披露が終わると、公民館の広場に旗頭が立てられる。高安の旗頭は、竿頭にヤイ、ナギナタを飾った2本あり、双方とも龍の口からヤイやナギナタが空に向かって伸びた形をしている。ヤイの旗文字が「勸農」、ナギナタの旗文字が「深耕」で、どちらも農耕との関わりを表しているという〔豊見城村教委員会文化課編2001：19〕。普段は、ヤイの旗頭は宜保殿内に、ナギナタの旗頭は波平に保管されている。旗頭が広中央に立てられると、1班と3班の棒士たちはヤイの旗頭の周囲に、2班と4班の棒士たちはナギナタの旗頭の周囲

に集まる。そして全員で、持っている六尺棒で旗頭の竹竿を激しく打ち鳴らしながらガーエー（氣勢をあげることをおこなう）。

次に、両元のウガミに移る。参加者達は2組に分かれて宜保殿内と波平へ向かう。東組（宜保殿内に向かう組）は、自治会長、顧問、当役、奉納舞踊をする女性会のメンバー、棒士たちとその他の自治会員たちで構成されている。西組（波平に向かう組）は、自治会長、顧問、当役、奉納舞踊をする女性会のメンバー、棒士たちとその他の自治会員たちで構成されている。行列は旗頭を担いだ棒士たちが先導し（東組の行列の先頭はヤイの旗頭、西組の行列の先頭はナギナタの旗頭）、四つ辻などに差し掛かると旗頭を立ててガーエーをおこなう（写真3-3-26）。道中、数回ガーエーをおこないながら、目的地に向かう。

両元での動きは次の通りである（今回は宜保殿内での参与観察をもとに記述する）。14時50分頃、宜保殿内に到着した。旗頭は母屋の前庭に立てられる。そして宜保殿内の当主と自治会長、役員数人は、屋敷の東側にある神屋に入る。神屋の中には、ヒヌカン、香炉が5つ、今帰仁へのお通し香炉が安置されている〔豊見城村教委員会文化課編 2001：25〕。それらに線香をあげ供物を供えて拝む。神屋での拝を終えると、当主と自治会長、役員たちは母屋に移動する。母屋では、一番座の神棚と門中のクディの香炉、そして二番座の仏壇を拝む〔豊見城村教委員会文化課編 2001：26〕。これで拝みは終了となる。拝みが終わると、母屋の前庭に女性会のメンバー（4人）が進み出て、かぎやで風を演舞する。この時は地謡ではなく、CDの音楽に合わせて踊られた。かぎやで風の後には、ヘーイ棒（1人）が披露される。ヘーイ棒の次には、タンカー棒（1組）が披露される（写真3-3-27）。その次に、ヤイ・ナギナタ（1組）が披露された。また、今回は特別に、宜保殿内の当主による個人棒も披露された。最後に、前庭の中央に旗頭を移動して、棒士たちがその周囲に集まり、ガーエーをして宜保殿内での儀礼は終了した。

宜保殿内での儀礼を終えると、東組は公民館へ戻る。この時、元来た道に戻るのではなく、別の道を通って遠回りしながら集落中を練り歩かたちで戻る。その道中、四つ辻に差し掛かると旗頭を立ててガーエーがおこなわれる。15時半頃、公民館前の広場に到着すると、最後にもう一度ガーエーをしてから、旗頭を電柱に縛って固定した。

16時頃、道ズネーが始まる。道ズネー出発前に、1～4班の棒士たちがそれぞれヘーイ棒を披露する。その後、道ズネーの隊列が組まれる。隊列は、ティンゲーを最先頭に、字の高齢者の方々、役員、供物（龕のウンチケーの際に龕の前に供えられていた供物）、龕、棒士たちの順番となる。高齢者の方々を先頭にするのは、高安が龕の霊に負けないことを示すためという〔平田編 2024：7〕。16時15分頃、道ズネーの隊列が公民館を出発。その後ろには東西の旗頭を担いだ棒士たちが続く。さらにその後ろには多くの見物客が続いて、道路は人で溢れかえった状況になる（写真3-3-28）。隊列は龕のウンチケーの際に歩いてきた道に戻っていくかたちで進む。四つ辻に差し掛かると東西両方の旗頭を立ててガーエーがおこなわれる。16時30分頃、ガンヤーに到着。旗頭をガンヤー近くの電柱に縛って固定する。そして龕をガンヤー入り口のスペースに置いて、龕を再び保管状態に組み替える。ティンゲーもこの時点で分解される。保管状態になった龕はガンヤーの中に運び込まれ、埃除けのために上からビニールで覆われる。そしてガンヤーの入り口に供物を並べる。しかしこの後すぐに拝みはおこなわず、しばらく時を待つ。この時、もう1組の役員たちがシーシヌメーに行っていて、最後の拝みは、シーシヌメーと時を合わせておこなわれるのである。シーシヌメーに行った組が拝みの準備ができると、旗（供物を包んだ風呂敷を六尺棒に括り付けたもの）を振って合図を送る〔豊見城村教委員会文化課編 2001：30〕。合図を受けて、ガンヤーでの拝みがおこなわれる。役員の合図で全員が「金・銀の鍵を閉めますので、次の辰年まで静かに御鎮まり下さい」と礼拝する〔平田編 2024：2〕。そしてガンヤーの入り口が閉じられる。

ガンヤーの入り口が閉じられると、奉納舞踊と奉納棒術がおこなわれる。奉納芸能は、男女の琉球衣装を着た踊り手によるかぎやで風であった。奉納棒術は、個人棒（1人）、タンカー棒（1組）、ヤイ・ナギナタ（1組）、ヘーイ棒（4人）であった。奉納棒術が終わると、旗頭を先頭に公民館に戻っていく。この時、道ズネー

の際に通ってきた道とは異なる道（中道）を通して、公民館に戻る。

道ズネー参加者全員が公民館に戻ると、コーヌユーエーが開催される。コーヌユーエーは、龕ゴウ行事を滞りなく終えることができたことに感謝し、祭りに取り組んできた自治会員の努力をたたえ、共に歓びを分かち合うことを目的としている。また、高齢者の健康長寿を祝う敬老会も兼ねているという [平田編 2024: 3]。コーヌユーエーでは、様々な芸能や棒術・武術が披露される。内容を紹介しますと以下の通りである。

- ・琉球舞踊：「かぎやで風」「鳩間節」「貫花」「南嶽節」
- ・琉球民謡：「花と花」「かりゆし祝囃子」「繁盛節」「ちばり節」
- ・こどもエイサー：「ミルクムナリ他」
- ・棒術：「ヘーイ棒」「個人棒」「タンカー棒」「ヤイ・ナギナタ」
- ・空手演武
- ・オキナワンえりフラ：「ていんさぐぬ花」「パイナップルプリンセス」
- ・民謡ショー

[平田編 2024: 3]

以上をもって令和 6 年の高安龕ゴウ祭は無事に終了した。

【棒の材料と演舞の種類】

棒は六尺棒を基本とする。一方、未成年用の短い棒もある。棒の材料は桧であるという。六尺棒は継承保存用として、専門家に制作依頼し整備し、一般用の六尺棒は個人負担としてまとめて購入している [平田編 2024: 4]。高安ではヤイ（槍）・ナギナタ（長刀）を用いた演舞もあって、ヤイ・ナギナタは専門家に作成依頼している [平田編 2024: 4]。ただし聞き取りによると、ヤイ・ナギナタは桧材ではないのではないかと（激しく打ち合うとすぐ破損するため）。

棒術の演武の種類としては、個人棒、ヘーイ棒、タンカー棒、ヤイ・ナギナタがある。

個人棒は、1 人だけで演武する。高安には、突きの動作のない棒術があって、高安独特の棒術だという [豊見城村教委員会文化課編 2001: 23]。

ヘーイ棒は、棒士同士が打ち合うことをせず、銅鑼鐘の打鐘に合わせて技を繰り出していく演武である（写真3-3-29）。個人が単独で演武する場合と、集団で動作を合わせて演武する場合の両方がある。ヘーイ棒は六尺棒を打ち合うことがないため危険性が少なく、非熟練者でも比較的習得しやすいという。そのため、班ごとの集団演武などでよく演じられる。

タンカー棒は、棒士 2 人が向かい合って技を繰り出しながらそれを防ぐ、組手形式でおこなわれる。実際に激しく棒を打ち交わすため怪我をする可能性もあり、そのためある程度の棒術の熟練者でなければ演ずることができないという。実際、タンカー棒を演武できる人は、棒術の初心者や龕ゴウ祭で久しぶりに棒に触れる自治会員に対して棒術を指南する、指導員の役割を担うことが多い。後述するように、熟練者たちは、衣装の上でもそれと分かるように区別されている。

ヤイ・ナギナタは、その名の通り、槍と長刀を用いて打ち合う演武である（写真3-3-30）。ヤイ、ナギナタは、六尺棒よりも短く太い棒の先端に、長五角形の穂先と、半月状の刃がそれぞれ取り付けられている。棒の長さが短いのでより接近しての打ち合いになるだけでなく、穂先や刃が付いている分武器の扱いが難しいため、タンカー棒以上に緊張感があり、観客達も観戦に熱が入る。

【棒組の構成員】

棒術の参加対象者は年齢 18 歳以上で健康な者とされているが、18 歳以下でも本人が希望し、保護者の同意が得られれば参加が認められている [平田編 2024:4]。実際、小学校低学年くらいの男児の参加もあった。先述したように、棒士として龕ゴウ祭に参加する際に、自治会員たちは 4 つの班に分けられて実際の行事に臨むが、この班分けは現在では練習時の便宜的な班分けを踏襲したもので、集落内における現在の居住地域や実家の場所などを基準にしているわけではないという。そのため、集落の西側出身の男性が、班分けの結果として、両元のウガンの際に宜保殿内を拝みに行く東組に組み入れられるということもありうる。

【棒の衣装・演舞時の音楽】

男性の服装は、全員、白いワイシャツ又は襟付きの白いポロシャツ、白系の長ズボンに白色のスポーツシューズ（運動靴）。その上で

- ①ヘーイ棒は、紫タスキ・豆絞り手ぬぐい。
- ②タンカー棒、ヤイ、ナジナタ、鐘打ちは、打掛け・紫頭巾・ミンサー帯・脚絆。
- ③旗頭、龕担ぎは、打掛け・紫頭巾・ミンサー帯・脚絆。

以上は事務局で準備する [平田編 2024 : 5]。

高安の棒術の演舞時には、銅鑼鐘のみが用いられ、歌三線などの演奏はみられない。

【練習状況】

今回の龕ゴウ祭のための棒術の練習は、令和 6 年 7 月 15 日から始まった。7 月 15 日からは月・水・金の午後 7 時から練習をおこない、8 月 20 日以降は毎日練習をおこなった。また、それに先だって、指導者、役員は事前にビデオで過去の棒術について検証したという [平田編 2024:4]。一般参加者への棒術の指導は、指導員がおこなう。指導員は、タンカー棒を演舞できるような棒術に長けた人物が務めるという。聞き取りによると、指導員も練習期間中には過去に指導員を経験した諸先輩から様々な指導を受けるという。ある指導員は、「自分も数回、龕ゴウ祭の棒に関わっているが、自分よりさらに多く龕ゴウ祭の棒に参加されている先輩がいらっしやるので、全然敵わない。先輩方はやはりすごい」と話した。このことから、高安の棒術は、ある程度棒術に通じた人々の先輩・後輩の関係の中で技術の維持継承がなされ、それを核として一般の参加者への指導普及がなされていると言える。

【コロナ感染症等をはじめ行事継承の今日的課題】

高安の龕ゴウ祭は 12 年に一度の開催であるため、今回のコロナ感染症蔓延事態の影響は直接受けなかった。ただし、棒術は毎年の綱曳きや夏祭りでも披露されているため、綱曳きや夏祭りの開催が見送られた 2020 年度～ 2022 年度は棒術の披露も中断された。しかし毎年演武をおこなう場があることや、今回の龕ゴウ祭にも小学校低学年の児童を含む多くの自治会員が棒士として参加していることから、他の地域に比べると高安の棒術がおかれた状況は明るいと思われる。

【引用文献】

- ・ 豊見城村教育委員会文化課編 2001 『豊見城村史だより』 第 6 号 豊見城村教育委員会
- ・ 平田実編 2024 『豊見城市宇高安龕ゴウ祭』 豊見城市高安自治会長（宜保樹）



写真3-3-25 籠と供物



写真3-3-26 四つ辻でのガーエー



写真3-3-27 宜保殿内での奉納演武



写真3-3-28 道ズネーの行列



写真3-3-29 ヘーイ棒



写真3-3-30 ヤイ・ナギナタ

著：神谷 智昭

第4節 宮古地区

宮古諸島における棒術の事例として、宮古島市新里と宮古島市野原の事例をとり上げる。

1 宮古島市新里の豊年祭と棒術

宮古島市新里（旧宮古郡上野村新里）は、宮古島の南西部に位置する村落で、2023（令和5）年12月末日現在の世帯数は400世帯、人口は735人（男性373人・女性362人）である（宮古島市役所統計資料）。

新里では、毎年旧暦6月の豊年祭において棒術を行う。豊年祭の日程は村落の日取り役が撰んでいるが、近年は夏休みに入ってからの日曜日に合わせる事が多い。新里は農村であるため、豊年祭は豊作の感謝と祈願の行事として行われてきた。

（1）豊年祭の概要

ここでは、2024（令和6）年7月29日（旧暦6月）に行われた豊年祭について、その概要を記す。

当日の午前中、村落の祭祀を担当する女性神人らが、地区内のムトウ（拝所）などを拝む。

午後4時頃から演者の住民が身支度をして公民館に集合し、準備をする。また観客の住民たちも集まり始める。

午後5時、豊年祭が始まる。最初に公民館前で開会式を行う。新里民俗芸能保存会会長および自治会長が挨拶する。続いて鳴り物（ホラ貝、笛、鉦、パーランクー）と唄に合わせて獅子舞をする。獅子は1人獅子で、2匹（雄雌）である。続いて全員で円陣をつくり踊る。終了後、ホラ貝を先頭に、住民たちが拝所に向けて出発する。

新里の拝所であるツカサヤムトウ（司屋ムトウ）に到着する。白衣を着けた神人の女性たちと地区の役員が拝所の建物に入り、祭壇に香を立て、酒を供えて拝む。終了後、拝所前に集まった住民に盃が廻される。続いて拝所前の庭で、鳴り物と唄・獅子舞・棒術の順で披露し、最後に全員で円陣をつくり踊る。終了後、一同は公民館に向けて戻る。その道中において、拝所入り口の道路・道中の辻・公民館前の辻の3か所で、鳴り物と唄にあわせて全員が円陣をつくり踊る。公民館に到着後、いったん休憩する。

夕方6時過ぎ、公民館前の公園広場の中央で、豊年祭の演目が始まる。最初の演目は獅子舞である。先ほどと同様に鳴り物と唄に合わせて獅子舞をする。2番目の演目は棒術である。棒術の青年10名と鉦1名が広場中央で棒術を披露する（演武の内容は後述）。3番目の演目は踊りである。先頭に男性20名ほどの集団、女性20名ほどの集団の順で隊列をなして入場して踊る。先頭の男性たちは柄に房をつけたものを右手に持っている。これをザヤといい、これを振りながら「ザヤ踊り」をする。このザヤは作物の実りを表わすという。4番目の演目は、女性集団による踊りである。女性たちには、クバ扇を持つ人と四つ竹を持つ人がいる。女性たちは円陣をつくり、「引き踊り」と「巻き踊り」を踊る。5番目は綱引きである。綱は事前に住民たちが作成して会場に置かれている。新里の綱は山野の蔓とマーニの葉・月桃などを編み込んで作る。これに市販の白ロープをつなげて長くしたものを使用する。住民が東と西に分かれ、雄綱と雌綱をカヌチ棒で繋げて綱を引く。綱引きは2回行う。この年は1回目に東が勝ち、2回目は西が勝った。最後に、全演者に観客も加わって大きな円陣をつくり、全員でクイチャーを踊ってすべての演目が終了となる。その後、住民たちは公民館での慰労会に移行する。

豊年祭の夕方の演目（獅子舞・棒術・踊り）は、以前は公民館前から出発してウプザー（大座の意味か）と呼ばれる場所までの道路で行っていたが、近年は道路の使用許可の問題等により、会場を公民館前の公園広場に変えた。もう一つ変化した点は、豊年祭に綱引きが加わった点である。かつて綱引きは、豊年祭とは別日に、子供たちの行事として行われていた。その頃は、中学生がツナシードウ（綱勢頭）として子供たちをまとめていたという。しかし、子供の数が減ったため綱引きを単独で行うことが難しくなり、豊年祭

の演目に組み入れて、大人と子供が一緒に綱を引く形に変えたという。

(2) 新里の棒術

新里の棒術については「新里民俗芸能保存会」会長の上里雅章氏（昭和 29 年生まれ）から伺った。

新里では棒術のことを「ボーフィ°」（°は中舌母音）という。棒術は旧暦 6 月の豊年祭にて披露する。豊年祭では上述のとおり、獅子舞に続いて行う形を取るが、獅子舞は「厄を祓って道を開く」意味があり、それに続く棒術も「棒を打って邪気を祓う」意味があるという。

【棒の組織と演武】（写真3-4-2）

棒術は新里青年会の青年が担当する。以前は高校を卒業する 18 歳から入会し、25 歳頃まで青年会として活動していた。現在は青年の数が減ったので 30 歳代の人も棒を担当することがある。棒術は、鉦役 1 名と棒 10 名で行う。以前はこれが 2 組あったが、現在は 1 組（11 名）で行っている。10 名のうち、ナカボー担当が 2 名いる。ナカボーは他の棒とは違う動きをするため、重要な役とされる。他に獅子舞の時の鳴り物（笛とパーランクー）も外側に並んで参加する。

演武は、鉦・太鼓・笛と唄にあわせて行う。最初に円陣になり、全員円の内側を向いて踊る。次に反時計回りの方向に進みながら踊る。次に円陣から縦の隊列に変形する。隊列の基本形は、先頭に鉦 1 名、左の列に棒 4 名、中の列にナカボー 2 名、右の列に棒 4 名で、並んでしゃがむ。立ち上がり、全員で同じ動きで踊る。次に 5 名（ナカボー 1 名）・5 名（ナカボー 1 名）に分かれてそれぞれ棒を打ち合う。次に 2 名・5 名（ナカボー 1 名）・3 名（ナカボー 1 名）に分かれて打ち合う。隊列での打ち合いを繰り返してから最初の円陣に戻り、同様の踊りを繰り返す。

【棒の種類と衣装】（写真3-4-3～4）

新里の棒は二尺程度の短い棒を使用する。使用した棒は径 3 cm・長さ 57 cm で、表面を黒く塗ったものである。またナカボーが持つ棒はさらに短く、径 3 cm・長さ 44 cm であった。ナカボーは顔の前で棒を回す所作があるので、怪我をしないように少し短くしてあるという。現在使用している棒は、宮古島市内の「宮古木工芸」という業者に作ってもらった。堅いクロキがよいと聞かすが、手に入らなかったのもでヤラブの木で作ってもらったという。

衣装は黒色の上着に白色のズボン（以前は白のステテコを着用）、帯・襷・鉢巻きは白色を使用する。衣装類は各自が持っている。

【棒術の保存と継承】

新里には「新里民俗芸能保存会」がある。結成の時期は不明であるが、豊年祭で上演する獅子舞・棒術・踊りなどの芸能の継承を目的とした団体である。会員は現在 30 名ほどで、豊年祭の芸能を経験してきた年長者が多い。年に 1 回総会があり、豊年祭前の練習にも参加して若い人たちを指導する。

近年は青年の数も減ってきたので、芸能の継承のために小中学生も練習に参加している。年々人が少なくなっているが、これまで豊年祭を継続してきた。例外的に、コロナウイルスが流行した 2020（令和 2）年から 2022（令和 4）年までの 3 年間は豊年祭の芸能を中断した。この時は、神人による拝みのみ行っていた。2023（令和 5）年から豊年祭の芸能を再開している。

また、これまでに新里の棒術を村外のイベント等で披露する機会もあった。「上野村まつり」や「クイチャーフェスティバル」に出演した。島外では、在沖縄郷友会や在関西の郷友会に招待されて棒術を披露したという。



写真3-4-1 豊年祭会場



写真3-4-2 演武で円陣を組む



写真3-4-3 棒術の棒(下はナカボー用)



写真3-4-4 棒術の衣装

2 宮古島市野原のマストウリヤーと棒術

宮古島市野原（旧宮古郡上野村野原、方言でヌバリという）は、宮古島の南西部に位置する村落で、2023（令和5）年12月末日現在の世帯数は985世帯、人口は1734人（男性1048人・女性686人）である（宮古島市役所統計資料）。現在の野原は、従来のシマ・村落に加え、地区内に自衛隊宮古島駐屯地を擁している。

野原では、毎年旧暦8月15日のマストウリヤーとよばれる行事において棒術を行う。マストウリヤーは、かつて王府時代に、村人が貢租の完納を祝ったことに由来する行事とされる。野原にはネ（子組）・トゥラ（寅組）・ウマ（午組）・サル（申組）という4組の近隣組があり、マストウリヤーの棒術は組ごとに組織される。

（1）マストウリヤーの概要

ここでは、2023（令和5）年9月28日（旧暦8月15日）に行われたマストウリヤーについて、その概要を記す。

【前日までの準備】（写真3-4-5）

数日前から男性の棒術と女性の踊りを練習する。練習は、仕事と夕食を終えた午後9時頃から行う。棒術は組別に練習し、女性の踊りは地区全体で公民館に集まり練習する。マストウリヤーの前日、旧暦8月14日の夜に行う最終の練習（リハーサル）をナイスクンという。午後8時頃から組ごとに集まり、棒術の練習をする。組の住民たちも路上に蓆を敷いて座り、歓談しながら練習を見守る。午後9時頃に公民館（正式名称は「農民研修所」であるが、以下では便宜上公民館と記す）に各組が集まり、野原地区全体でのリハーサルを行う。この日は男性・女性ともに普段の服装のまま参加する。

【当日午前の拝み】

マストウリヤー当日の行事は、午前中の神人による祈願、夕方から組ごとに行う祝宴と棒術、夜9時から公民館広場で行う棒術と踊りの上演、の3段階からなる。

野原には、ツカサ（司）をはじめとした女性神人3名と男性神人2名がいるが、マストウリヤー当日の拝みは、ツカサ1名とトゥム（お供）役の女性1名が行った。午前10時30分頃に公民館の広場に集合し、公民館広場の隅にある拝所に供物（花米・塩・フキャギ餅1個）を供え、香2枚を立てて拝む。続いて自動車でウブダキ（大御嶽）に移動する。祭壇の5か所の香炉に上記と同様の供物を供えて拝む。当日の拝みはこれで終了となる。

【当日夕方、組の祝宴】

夕方から組ごとにマストウリヤーの祝宴を開く。各組の支部長宅の前の道路上に席を作り、住民が料理ともの飲み物を用意して歓談する。午後8時頃から棒術を担当する青年らが衣装に着替えて集まる。午後9時、区長がマストウリヤーを開催するため公民館に集まるよう放送する。出発時、青年たちは路上で棒術を披露し、隊列をなして公民館に移動する。住民も公民館広場に移動し、組ごとに集まって着座する。

【当日夜、公民館での上演】

公民館広場の入り口に、棒術の青年集団（組ごとに並ぶ）と女性集団（組別ではない）が整列して入場する。先に青年集団が、反時計回りの方向で円を描きながら進み、唄に合わせて棒術を披露する。次に女性集団が同じく反時計回りの方向で円を描きながら進み、唄に合わせて踊りを披露する。次に青年集団の列と女性集団の列がつながり、青年集団を先頭にして反時計回りの方向で一つの大きな円陣を形成し、唄に合わせて踊る。最後は円陣のまま一緒にクイチャーを踊る。これで1回目の踊りを終える。休憩後、同様の棒術と踊りを再度披露する。終了後は組ごとに集まって祝宴となる。

（２） 野原の棒術

野原では、棒術のことを「棒振り」という。野原公民館にあるマストウリヤーの説明板に「野原のマストウリヤーの特徴は、男の棒振りと女の抱き踊りとなぎ踊りで構成」されることが記されており、棒術は「棒振り」と呼ばれていることがわかる。

【棒の組織と演武】（写真3-4-6）

棒術は、地区内の組（子組・寅組・午組・申組）ごとに組織される。この4つの組は、かつて野原にあった4つのマスムトゥ（枡元）を中心に形成された近隣組織であり、現在も組ごとにマスムトゥの場所が傳承されている。王府時代には各マスムトゥに貢租を集めて納めていたとされ、マストウリヤーの行事は貢租を完納した祝いに由来するという。

棒術は組ごとに青年男性5名で組織され、他に鳴り物として鉦1名・笛1名が加わる。5名の内訳は、前2名・ナカボー（中棒）1名・後ろ2名である。棒術の練習はマストウリヤーの数日前から始める。夜9時頃に組のマスムトゥの脇の道路（辻）で練習する。マストウリヤーの当日は、組の支部長宅の前の道路に住民が集まって祝宴を開き、9時頃に棒術を披露してから公民館の会場に向かう。

公民館の広場には、子組・申組・午組・寅組の順で隊列をなして入場する。「寅組を先頭にするとトゥラヌファカジ（寅の方向からの大風、台風）が吹く」ので、寅組は必ず隊列の最後尾にするという。

棒術の隊列は、鉦と唄に合わせながら、反時計回りに円を描きながら進む。演武には、5名が同時に同じ所作（踊り）をする形、3名（前2名と中棒）と2名（後2名）に分かれて打ち合う形、2名（前2名）と3名（後2名・中棒）に分かれて打ち合う形、5名で打ち合う形（前と後ろが同時に中棒に打ち込む）などがある。特に中棒の役割が重要で、リーダー格の人が担当するという。

また野原の棒術は、女性集団の踊りとセットで行われる点も特徴的である。女性集団は組別ではなく、野原地区全体として集まる。このうち前列の年長女性はクバ扇を持ち、後列の女性は四つ竹を持つ。最初に青年集団が棒術を披露し、続いて女性集団が同じく反時計回りに列をなしてダキブドイ°（抱き踊り）とナギブドイ°（なぎ踊り）を踊る。次に棒術の男性集団と女性集団の順でつながって大きな円陣を形成して進む。最後は全員でクイチャーを踊る。

【棒の種類と衣装】（写真3-4-7）

野原では三尺程度の短い棒を使用する。この棒は業者から購入したもので、棒の先に5円玉が仕込まれている。棒の材質は不明である。

衣装は、紫色の頭巾と襷・白色の上衣・黒色のズボンに縞模様の脚絆をつける。4組とも同じ衣装である。棒と衣装は公民館で保管している。

【棒術の保存と継承】（写真3-4-8）

野原には「野原民俗芸能保存会」がある。結成の時期は不明であるが、マストウリヤーで上演する棒術と踊りの保存と継承を目的とした団体である。「野原のマストウリヤー」は、1980（昭和55）年に国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選定された。保存会は、この無形民俗文化財の保持団体として位置づけられている。

棒術の継承については、担い手となる若者の減少が課題となっている。以前は早ければ高校生から棒をやっていたが、近年は若者の減少によって演者の年齢が高くなっている。女性の踊り手の人数も以前に比べて減少しているという。

また、これまでマストウリヤーの行事を継続してきたが、コロナウイルスが流行した2020（令和2）年から2022（令和4）年までの3年間は行事を中断した。2023（令和5）年から再開している。



写真3-4-5 マストリヤー前日の練習



写真3-4-6 マストリヤーの棒術



写真3-4-7 野原の棒

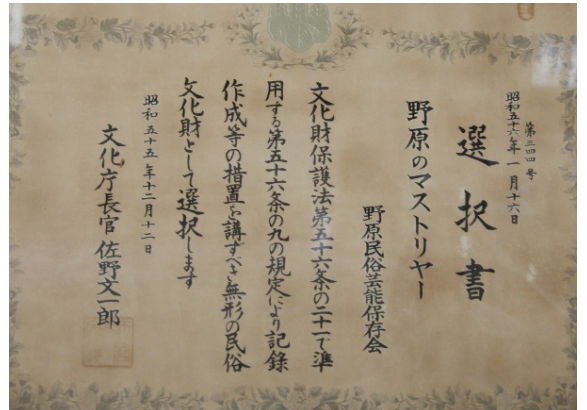


写真3-4-8 文化庁・無形民俗文化財の選択書

著：萩原 左人

第5節 八重山地区

八重山地区においては、代表的な事例を選定するにあたって、次のような考え方で6つの事例を選定し取り上げた。

八重山は単独の一島一市・町である石垣市と与那国町とは対照的に、竹富町のように一町でありながら多くの島々から成り立っているところもある。石垣市が所在する石垣島は広範囲の地域に村々が展開しており、与那国島は日本の最西端にあつて様々な文化の影響を受けた地域でもある。したがって、地域の選定にあたっては、各市町から必ず1事例は取り上げることとし、島嶼地域である八重山、とくに島々を多く抱える竹富町の島嶼部からは3例を取り上げることとした。

第2章第3節において、村落と行事の一覧で示しながらすでに指摘したように、八重山地区においては、豊年祭や結願祭、節祭において棒術等が多く披露されているが、その他に数は少ないものの、盆行事、盆行事にもかかわるイタシキバル、十五夜、旧正月の綱引きなどで披露されている。

そのようなことから、八重山地域では主要な祭祀として広く行われている豊年祭、結願祭、節祭は代表事例にあたると考えた。そこで、豊年祭は四箇村のプーリィ（豊年祭）を取り上げた。石垣市の市街地に所在する登野城、大川、石垣、新川は総称石垣四箇村と呼ばれ、元々は登野城村、大川村、石垣村、新川村だったところで、現在の字にあたる村落だった。結願祭は石垣市の川平、節祭は竹富町西表島祖納・干立を選定した。その他については、八重山では唯一の事例となる竹富島の種子取祭、また特異な事例として波照間島で盆行事の期間に行われるムシャーマ、を取り上げることとした。

なお、各村落の人口と世帯数については、沖縄県市町村課がホームページに掲載している「市町村の町字別住民基本台帳人口及び世帯数（令和5年1月1日現在）」を元としている。

1 石垣市四箇村のプーリィ（豊年祭）

登野城、大川、石垣、新川の四箇村のプーリィ（豊年祭）については、ここでは新川の事例を中心に取り上げながら、大川の採録データがないことから、必要に応じて登野城と石垣の例を紹介しておきたい。

【行事の概要】

豊年祭は旧暦6月のカンビューリィ（神日和）と呼ばれる癸や甲の日とその翌日の2日間にわたり行われる。その2日目の夕刻には新川にある真乙姥御嶽での儀式が終わった後、この御嶽から西へ移動した十字路を中心に重要な儀礼が行われる。それは豊年祭の重要な場面となるツナヌミンと呼ばれる儀礼では、台の上に一人は鎌、もう一人はナギナタを持ち、対峙して演武を繰り広げられる。今年の豊作への感謝と来年の豊作への祈願を目的として行われる豊年祭の終盤に行われる儀礼である。

新川南風ヌ島（ハイヌスマ）カンター棒は獅子に対峙しての武術がある、特に定められた期日はない。お祝い等で演じられる。令和5年は旧盆の送り日（オクリビー）に行われる獅子祭の前に演じられた。

〔登野城〕登野城では棒は豊年祭（オンプール）と結願祭の2回披露される。豊年祭は上記と同じ期日であるが、結願祭（旧暦8～9月）は12年に1回、寅年に開催される。前は去年の2022年に開催した。開催場所は豊年祭・結願祭とも天川御嶽（アーマーオン）である。天川御嶽への奉納として、境内において棒術演武を行う。



写真3-5-1 登野城字会の結願祭の棒〔石垣市登野城〕

棒術演武は、結願祭の演舞奉納として執り行われてきた経緯がある。結願祭は 1974 年以降では、十二支の寅年に開催されている。また、2009 年結願祭開催に向けた棒術演武の機運を高めるため、2005 年頃から豊年祭（オンプール）でも棒術奉納を行うようになり、それ以降は豊年祭でも棒術奉納を行って来ている。

〔石 垣〕行事は豊年祭（プール）や結願祭（キツガンサイ）、牛ヌ願（牛ヌ願い）で演じられる。開催時期は豊年祭のオンプールは 7 月後半から 8 月前半（旧暦 6 月）、結願祭は旧暦 9 月（6 年に 1 度だが前はコロナの影響で 1 年ずれる）牛ヌ願いは旧暦 2 月（2 年に 1 度）となっている。宮鳥御嶽への豊作の願い、牛馬の供養、一年の願いなどの目的がある。棒術・獅子舞は字石垣にある宮鳥御嶽前庭、ならびに同牛ヌ御嶽前で披露される。演武は奉納としての位置づけがある。

【由来・来歴】

本来は武術であったと考えられる棒術の新川南風ぬ島（ハインスマ）カンター棒が伝承されている。由来としては、昔、漂流民から唐眞家に棒踊りが伝わり、南風ぬ島カンター棒として唐眞家の家宝として伝承されていた。1757 年に新川村が創建されたのを機に、新川村の宝として後世に伝えていくこととなったとされる。

新川村の経験者により伝承されている。1945 年は太平洋戦争のため中断。

2 人の若武者は武士（役人）と平民（農民）、あるいは牛若丸と弁慶と表現される場合がある。近年では、天川御嶽（アーマーオン）への奉納演武が行われている。

2 日間にわたり豊年祭は行われるが、その 2 日目の夕刻に登場し演じられる。余興は 2 日目の祭祀行事の終了後、西へ移動して、日の入りで西の空が赤く染まった頃合いに松明を焚いた中で開始され、暗くなった頃に両者の勝敗はつかないまま終了となる。その後、綱引きが行われ勝敗は決まる。

【演武の種類と内容】

型の演武（舞）や対面での打ち合い等がある。演武には、東の大將と西の大將と呼ばれる 2 人の武者が登場する。東の大將はナギナタを持ち、ナギナタで振り払う、切り込む、振り下ろすなどの攻撃をする。一方、西の大將は鎌をもち、相手の攻撃を飛んでかわす、身を入れ替えてかわす、鎌で受け止めるなどをし、終盤に唯一、相手に鎌を足元めがけて足払いの攻撃を行う。また、それぞれの動作の合間には、お互いに見えを切り、威嚇して激しい攻防を繰り返す。最後にお互いに見えを切り、引き分けで、台が離れることにより演武は終了する。

〔登野城〕登野城独自の棒術演武として、六尺棒、カマ（ガギ）を使用する組手があると口伝により伝わっているが定かではない。また、ナギナタやカタナなどを使用する組手は、他村（字）の棒術演武を参考にその当時の師匠等が創作したと伝わっている。

六尺棒、三尺棒、ヤリ、ナギナタ、カタナ、カマ（ガギ）、サイ、トンファー、ヌンチャクを 2 名 1 対の組手で演武する。※ヌンチャク演武は 1985 年以降の記録がない。型の演武（舞）と対面での打ち合い等がある。

演武構成は、横笛による「ナナツングニ」で始まり、棒術師匠（1 名）及び副師匠（1 名）により境内を清め塩で清めた後に演武者が鳥居から境内に入場する。入場する際には「アシフン」と呼ばれる足さばきにより、境内を円形に囲むように進んで行く。全演武者が入場したところで、ボラと銅鑼が鳴り、2 人 1 対の演武者が境内を左周りに円を描くように軽快な小走りで 1 周し、鳥居と拝殿を結ぶ位置につくとボラがなり、演武が行われる。演武終了後は、両者拝殿を向き、左周りに円を描くように境内を半周して、前演武者（最初の演武者は最終演武者）の後ろに並ぶ。すべての演武を終えると、銅鑼の合図で掛け声『ヤー』で一斉に立ち上がり、鳥居と拝殿を結

ぶ線の両端から集まり、各々の武器を対面する演武者の武器に当て、銅鑼の合図で掛け声『ユイ』で、左右に分かれた列で境内を回る「スーマキ」を行い、入場時の位置まで着いたら、返し打ち（2回目）の演武を行う。

〔石 垣〕型の演武（舞）がある、対面での打ち合い等がある、獅子に対峙しての武術がある。演武構成は、三尺棒・六尺棒・間討ち棒・槍棒・ガギ棒・ティンバイ・三人棒（サイ・トンファー）（形棒）、獅子の前に形棒。農民と役人と伝承されている。

【演武の組織と稽古・継承方法】



写真3-5-2 南風又島カンター棒〔石垣市新川〕



写真3-5-3 南風又島カンター棒の演武〔石垣市新川〕

現在、新川村の誇る伝統民俗芸能として、保存会を組織し継承されている。平成元年に南風又島カンター棒保存会が発足し、その継承に努めている。新川字会、南風又島カンター棒保存会が中心的な組織である。棒の出演者は、新川村に在住する10代～50代の男性を中心としている。

鳴物（笛吹、太鼓打、銅鑼）と、棒舞組（10～15組）、獅子2頭で構成される。棒舞組

は、地謡の音に合わせて、2列に整列して入場し、ニナイディ（備えの構え）、廻り舞い、舞いティ（一番の舞）、ツキディー（二番の舞）、カミディー（三番の舞手）、ウツディー（4番の打ち手）、マキティー（巻き手）、カクティーを演舞する。演舞が終わると、雄雌の獅子が登場し、獅子パーシーの声かけの元、獅子舞が演じられ、獅子舞が終わると、全体で退場する。

武術の部分は専門の師匠がいる 戦前、戦後、復帰後しばらくは5町内（上の村）の方が中心に役割を担った。近年は5町内以外の方が参加する場合も見られる。新川字会の歴代経験者。戦前、戦後、復帰後において10代後半から30代後半の男性が役割を担った。戦前・戦後の状況は定かではないが、近年、希望者は祭祀担当者へ出演したいことを申し出て、豊年祭の1ヶ月前頃より稽古を開始する。稽古場所は決まっていない。公民館、公園ほか、人目に触れず稽古を行う。

棒の指導者は新川字会の歴代経験者が務めている。定期的な稽古は行われないが、祝事等で演じることが決まると、祝事の日より早くて約1ヶ月前から練習を開始する。稽古場所はとくに決まっていないが、公民館、公園、学校ほかで行われる。令和5年は石垣中学校を中心に練習が行われた。

これまでに、石垣小学校創立80周年記念式典、石垣港の開港式、沖縄海洋博覧会、名護市で開催された南ぬ島大会、与那国町での広域まつり、石垣島まつり、宮良長包生誕120年記念式典、石垣空港開港式、真乙姥御嶽拝殿落成式などで演じられた。

〔登野城〕棒術の演武は、近年は男性のみ出演している。年齢制限はない。進行伴奏（笛、ボラ、銅鑼）は年齢・性別の制限はない。演武を行う行事の約2～3週間前から練習が行われる。最近では現役世代が役職を担うようになってきたことから、副師匠を2～3名、会計も加えた組織に変化してきている。伝承を継承するために、登野城字会が主体となって保存会を設立し、地域内で継

承者の育成に努めている。

継承は基本的には歴代の棒術師匠から口伝による演武指導により伝承されてきた。武術の部分に特化した組織があり、武術の部分は専門の師匠がいる。青年会組織を中心とした若者が演武を担い、経験を積んだ青年会 OB 等が組織運営を行うための師匠（1 名）や副師匠（1 名）の役職を担う。

近年ではビデオカメラ等による動画撮影を行い記録映像として残し、演武の参考や振り返り等の棒術奉納を行って来ている。

稽古場所は、近年は師匠を担う責任者の屋敷形態や事情により練習場所の確保が行われる。庭やそれに面した路上、公園、公民館、天川御嶽などで行われている。

〔石 垣〕運営組織の主体は石垣字会である。武術の部分に特化した組織がある。「棒・獅子保存会」がある。中心となる指導者は仲新城家から出たともいわれる。稽古のスケジュールは豊年祭三週間前から宮島御嶽で行っている。

かつてそれぞれ中断した時期があり、棒術は昭和末期再興、獅子舞平成 5 年ごろ再興したことがある。とだえる前までは字石垣の農家の若者のみ、再興後は 10 代～ 20 代 字石垣の字民、現在は 10 代～ 30 代字石垣関係者となっている。

【演武の衣装と道具・楽曲】

棒舞及び鳴物の衣装・道具は、五・五尺程の棒、頭に草の繊維を赤く染めたカンター、上衣は白地の七分小袖、下衣は白地長パンツで、黒帯に赤襷、背中に緑色の葉っぱをつける。また、足は赤地に白線の脚絆と草鞋を履く。鳴物は竹製の横笛、太鼓及びバチ棒、銅鑼及びワラ棒を持つ。入嵩西家（字新川 151 番地）で大切に保管されている。南風ぬ島カンター棒保存会に小道具・装具の部があり、道具の修繕や製作を担っている。

新川字会の公民館にて保管されている。毎年、豊年祭のために準備委員が任命され、その方々により道具等の準備がなされている。なお、衣装や道具、楽曲などについてとくに変化はない。

〔登野城〕演武者：袴下と肌襦袢をベースに、たすき掛けと腰ひもに黒帯を使用する。足脛に脚絆を巻き、黒足袋（わらじ）を履く。頭部にはカニウツパイ（紅型風呂敷）で覆い、二又に分かれているツノマタと一緒に白帯で全体を固定する。師匠・副師匠：袴下に袴と肌襦袢をベースに、たすき掛けと腰ひもに黒帯を使用する。履物はわらじを利用し、頭部には幅広の白帯を巻く。

進行伴奏（笛、ボラ、銅鑼）：師匠・副師匠と同様の着付け（年度によってはポロシャツ着用の場合もあり）。近年：笛（ピー）2～3 名、銅鑼 2 名、ボラ 2 名。楽曲はナナツガンニである。

近年、すべての衣装・道具は師匠が保管している。現在使用している六尺棒、三尺棒、ヤリ、ナギナタ、カタナは昭和 48 年頃に地域の方が手作りで製作したと思われる。ガギ（カマ）、サイは手作りと思われるが、製作時期は不明。トンファーは市販品と思われる。2006 年頃に市販の六尺棒を数本購入。2022 年に文化庁補助事業により、ナギナタ、カタナ、ヤリを新調した（地域の方による手作り）。道具類の購入費は字会予算にて、字会長が発注している。

〔石 垣〕衣裳・棒、他の用具などは公民館で保管している。衣装は字会費、棒は棒うつで修繕を行っている。木製・ガギ・ティンバイは鉄 変化はない。楽曲については変化はない。

【行事継承の今日的課題】

字新川では、令和元年から 4 年にかけてはコロナ禍で行事が縮小されたため、4 年間は演じられなかった。近年は、子どもたちの参加もあり、時間帯を早くしてほしいとの声がある。道具の修繕、衣装の調達と演目の記録の実施が課題である。

字登野城では2020年～2022年の3年間は、豊年祭の開催規模を縮小したことで、奉納演武を行うことが出来なかった。課題としては、棒術では使用する道具が多く、高額な紅型風呂敷などもあることから、それらを保管する専用の場所が必要となっている。

字石垣の課題としては人材確保や道具等の資金である。コロナの影響により縮小があり、演武の数が少なくなっている。

2 石垣市川平の結願祭

【行事の概要】

棒術はムラの結願祭で奉納されている。結願祭は旧暦の8月頃に日を選んで行われる。正日の奉納・余興場所はンニブシオン（稲ほし御嶽）、別称のユブシオン（群星御嶽）である。結願祭はンニブシオン、ヤマオン（山川御嶽）、アーラオン（赤イロ目宮鳥御嶽）、キファオン（浜崎御嶽）の四つの御嶽で、播種、生育、収穫が雨に恵まれ、災害にも免れて無事にすべて済んだことに感謝と来期の豊作および住民の幸福を祈願する、一年間の儀礼のしめくりとなる。

なお、節祭でもかつて奉納余興が行われていたが、結願祭と二回の開催となると、ムラの人々の負担が大きいため、昭和34年以降は廃止された。〔川平公民館、1976、P103〕

【由来・来歴】

約500年前、川平村に仲間満慶山という人物が生まれた。彼は長じて武術の優れた青年となった。満慶山は毎日棒術、剣術、弓術を考案し、自己流で攻防戦の稽古に余念がなかった。ある日、その修練振りを村の若者達が、遠くから見て驚いた。まるで飛鳥のような身軽さ、早業である。そして自分達も満慶山の様にならうとの一念から、遠慮なく指導乞うたところ、満慶山も喜んで承諾し教えたのが棒術の始まりであると伝えられている。

【演武の種類と内容】

奉納余興には「庭の芸能」と「舞台の芸能」がある。「庭の芸能」では狂言、舞踊などを紹介するスーブドリ（総踊り）、祓いの意味で太鼓、棒、獅子舞の座見舞と本舞がある。座見舞では、御嶽の境内を笛、太鼓、棒術、獅子舞の順に入場し、境内を清める。雨天の場合は先頭棒等の一部棒術のみンニブシオンで奉納し、他はすべて川平小中学校の校庭および体育館で実施する。本舞でも太鼓、棒、獅子舞の順に披露される。棒の演武は2回行われ、演技中は銅鑼と太鼓が打ち続けられる。〔沖縄県教育委員会、1981、P11～17〕

川平の棒は「百姓棒」ともいわれ、対面での打ち合い等がある。本舞は刀棒から始まり約10組の棒術を奉納する。刀、ナギナタ、六尺棒、三人棒、エーク、ティンバイ、カニパー（クワ）、カマ（ガギ）の棒術を、三人棒以外は二名一組の組手で演武する。基本的には仲間満慶山から伝承された棒術を基本とし、役人と百姓の戦いや三人棒（大男と小人の戦い）等、迫力ある棒術が特徴である。

【演武の組織と稽古・継承方法】

12歳～50歳までの男性が中心となる。術の部分は専門の師匠がいる毎年、公民館から役割が言い渡され、棒・太鼓の責任者を中心に演者を決定する。本番約10日前後から練習を始める。

近年は保存会が中心になって組織、役割を決定している。高嶺・宮良・前浜・大浜・波照間・南風野・岸本など川平村に関係のあるすべての方が指導してきた。

演武の動画撮影や棒術の工工四を作成するなど、先代からの棒術演武を正確に継承できるようにしている。主に青年会や青年会OBなど等で構成される「川平棒・太鼓・獅子保存会」を結成して、保存継承に取り組

んでいる。

【演武の衣装と道具・楽曲】

座見舞と本舞では衣装が異なる。座見舞では上衣は紺地に赤襟り、下は白ズボン、たすき、黒帯、白黒縦縞の脚絆、頭には、カナヰフチブイ（麻糸で織った松竹梅の模様のある大風呂敷）をかぶる。カク（棒組の前に立つ人）の上衣は短めに、ナカンギリ（棒組の後ろに立つ人）の上衣は、やや長めである。扮装は赤襟の黒上衣に白襦袢、タスキ、帯、棒縞の白黒脚絆。頭は唐草模様の頭巾を被り、兜を飾る。本舞では、太鼓の衣装は座見舞のときと異なり、頭巾を白鉢巻後結びにする。赤羽織はなし。

昔の衣装は芭蕉着物に帯を締め、草履を履いたという。時代が変わり、洋服に靴を履いた時代もあった。近年では着物、はかま、黒足袋に、下駄が定着していたが、最近では昔の服装に戻している。楽曲はすべて笛と銅鑼・太鼓で行う。

棒の材料はキャンギ（イヌマキ）・ガジュマル・クバ等の島材木を使用している。衣装、棒等の道具は全て公民館と保存会で管理している。主に公民館の予算で対応しているが、近年では公的補助金等も活用して、整備するようにしている。

【行事継承の今日的課題】

課題としては道具の修繕や衣装の費用不足などがあげられる。また、若者の島離れがあり、後継者不足が懸念されている。さらに、コロナ禍の影響で、3年間縮小して開催したため、後継者育成が出来なかったことがある。

3 竹富町竹富の種子取祭

竹富島の種子取祭は、1977（昭和 52）年に「竹富島の種子取」として国の重要無形民俗文化財に指定されている。

【行事の概要】

種子取祭は「タナドゥイ」、十五夜祭は「ジングヤ」と呼ばれる。種子取祭は、10 日間に及ぶ島の最大行事で節祭（シチ願い）から 49 日にあたる戌子（つちのえね）の日を祭日として（旧暦 9 月～10 月）に行なう。甲申（きのえさる・トルツキ）の日に計画手配をして、奉納芸能の練習を始める戌子には「火の神」「農業の神」に種子取祭の祈願をし「飯初」（粟餅）を作る。7 日目 8 日目の両日に奉納芸能があり庭の芸能舞台の芸能の奉納の中で武術的所作の表現の形態がある。奉納芸能の中で庭の芸能として棒踊り（棒術）があり、対面での打ち合いが見られ、腕棒は素手で演じられ、女性が舞う。また、舞台芸能の中にもキョングンやブドゥイの中にも空手の型が見られる。

節祭（シチ願い）から 49 日目の前後 10 日間に行われる祭で島最大の祭の種子取祭と旧暦 8 月 15 日の十五夜祭（ジングヤ）でも棒術が演じられる。ジングヤは、ヤドウ（杖）と言われる工作物の上で演じられ大勢の担ぎ手がいる。

種子取祭は、世持御嶽（ユームチオン）で執り行われ、十五夜祭（ジングヤ）は、以前は各集落の指定場所で行われていたが、電線やその他の障害の為、旗頭の移動が困難なため、学校の校庭で行われた。コロナ禍で神事のみ行われ奉納芸能は中止となり、本年令和 4 年は神事と奉納芸能（重要な演目を数点）奉納することが出来た。

【由来・来歴】

種子取祭は 600 年の歴史をもつといわれるが、いつ頃始まったのかわからないとされる。沖縄本島で行わ

れていたタントウイ（種子取）が、八重山の島々にも伝わったと考えられ、琉球王府との往来が頻繁になったオヤケアカハチ騒乱以後、すなわち 1500 年以降のことと推察されている。〔狩俣恵一、2004 年 P13 ～ P14〕

【演武の種類と内容】

種子取祭は、シラ（稲積のこと）に保管してある粟の種子を選定し取り出しその種子の播種時期戊子（ツチノエネ）に播くことが重要であり、また播種後の種子が無事に発芽し、順調よく生育することを祈願し、その時期が来たら豊年万作でありまた来夏の世も豊作であるようにとの祈願と万作であったことへの感謝を奉納芸能として神に感謝する

種子取祭は、600 年とも 700 年とも言われており、中断等は厳密に言えない。ただ奉納芸能は最近では 2020 と 2021 年のコロナ禍により中止しており、以前にも戦時中とか台風襲来により中止したことはあるが、祈願は戦時中でもコロナ禍でも中止しないで、ずっと継続している。

種子取祭で奉納される「庭の芸能」で行列演目の最初が棒（ボー）で、棒は琉球古武術を現し、棒（六尺）、槍、刀、長刀、鎌等を持って演じる。楽器は銅羅鐘太鼓ホラ貝（ブラ）の音で演技を行うため、祓い清め意味があり対面での打ち合いが基本である。また、同じ行列で女性による腕棒（ウディボー）という行列があり、女性が素手で棒を演技するので大変人気がある。

行列の順序は①棒（ボー）、②太鼓、③マミドーマ、④ジツチュ、⑤真栄（マサカイ）、⑥祝種子取、⑦腕棒（ウディボー）、⑧馬乗り（ンマヌシヤ）である。「庭の芸能」の一部は翌日も同じよう奉納される。「庭の芸能」が終わると、「舞台の芸能」へと移る。

「庭の芸能」での棒（ぼうー）は対面での打ち合いである。「棒踊り」とも称される。1 番棒から 5 番まであり、二人一組で、1 番棒は（六尺棒）2 番棒は（刀と槍）3 番棒は（槍と刀）4 番棒は（長刀と鎌）5 番棒は（長刀と力）である。方は大刀でもある。

棒踊りは三部構成で、第一部は二列で、広場に入場し、はじめに奇数組の者が棒を打ち、次に偶数組の者が棒を打ち合い、それが終わると一列になって退場する。第二部は再び全員が一列となり入場し、互いに向き合って全員が棒を打ち合う。終わると退場する。第三部は各組ごとに入場して打ち合い、退場するという流れである。この打ち合いの組み合わせには、かつてテンベーと槍、槍と長刀の打ち合いもあった。〔沖縄県教育委員会、1981、P29 ～ 31〕

また、腕棒（ウディボウ）は武具は使用せず、素手での演武である。二人一組の 10 人が入場し、対面となり空手の型のような突きをしたり、掛け声いさましくお互い腕を組み合って引き合うなどの競い合いをおこなう。

【演武の組織と稽古・継承方法】

戦前、戦後、復帰後は多少の変化（時代に応じて）はあるとされるが、基本的には大きな変化はない。種子取祭やその他の祭に実行委員会なるものはないが昔から公民館長が祭主となりすべての祭を取り仕切るが古来より玻座間集落、仲筋集落に狂言部や舞踊部があり、更に玻座間狂言保存会、仲筋狂言保存会があり、演目は決まっている。

武術の部分は専門の師匠がいる。上記のように各集落の狂言部（キョングンドウン）舞踊部（ブドウイドウン）には歴代の師匠が居て指導におり各部は保存会的役目しており、師匠の後継者も保存会員の中で決め脈々と続いており、戦前戦後、復帰後も変化はない。



写真3-5-4 腕棒の演武〔竹富島〕

各集落には踊りや狂言の師匠がいる。また、島外では石垣竹富郷友会の会員を中心に玻座間狂言部があり、各部にも師匠がいる。また、島外では石垣竹富郷友会の会員を中心に玻座間狂言部があり、各部にも師匠がいる。

腕棒は、かつて玻座間村の男子が演じていたが、それほど人気がなく、いつしか演じられなくなった。そのようなとき、仲筋村の狂言部の師匠であった仲里長正さんがこの腕棒を女性に演じさせようと考えた。長正さんは奥さんの仲里ハルさんと友人の小底ハルさんを使い、やって、玻座間の師匠に頼んだところ、師匠は「ウリヤ、ウムッサンネンバ、ムチハリ（これは面白くないので、持っていきなさい）」と快く承諾してくれたという。それで腕棒は仲筋の女性が演じる人気演目になった。腕棒は、空手を取り入れた女性どうしの戦いの演技であるが、男性の演技としては単純な所作で物足りない。ところが、女性が演じると爆笑と喝采がわき起こる魅力ある演目とされている。〔狩俣：2004 年、p22〕

祭事への参加者は、島出身で島に存在し島の祭事行事に参加できる人、また島外出身であってもよく趣旨を理解、協力出来る人また伝統的に受け継がれている家柄等、例えば弥勒神の御面などを被る人等は世襲的でありまた小学校高学年から 60 才～ 70 才ぐらいで頑張れる人である。祭が近づけば各集落の会館やそれぞれの従来場所ではじまる。

稽古のスケジュールは、古来の習わしでは種子取祭では、トルツキ（キノエサル）の日から役割分担を決めて、練習に入るのが謂れであるが、現代では小学校高学年から参加する子もいるので夏休みに入ると練習に入る地域（集落）もある。

島では昔から男は狂言部（キョングンドン）女は舞踊（ブドウイドン）に入るのが習わしである。ブドウイキョングン遅くとも 1 か月前から始まる。各集落には集会所があるのでそこで練習（舞踊の場合）狂言は（玻座真はまちなみ館）中央公民館仲筋はこれまでは老人コミュニティセンターではあったが複合施設になった為、1 日保育所を利用している。

竹富島では種子取祭に関して「竹富島民俗芸能保存会」が設立されている。竹富島の字は大きくは玻座間ムラと仲筋ムラに分かれ、玻座間ムラはさらに東と西の集落に分かれている。そのため、奉納芸能の狂言部（男子）は玻座間と仲筋の二つの組織に分かれており、踊り部（女子）は玻座間東（玻座間村の東集落）・玻座間西（玻座間村の西集落）・仲筋の三つの組織である。狂言部（男子）の担当は「庭の芸能」で、その中に棒が含まれる。他には太鼓・馬乗者と「舞台の芸能」のホンジャー・ミルク（弥勒神）・狂言・組踊・芝居を受け持つが、玻座間と仲筋の担当する演目は決まっている。踊り部（女子）は玻座間東（玻座間村の東集落）・玻座間西（玻座間村の西集落）・仲筋支会に分かれており、それらの演目もほぼ固定している。なお、演目の一つである「腕棒（ウディボー）」は仲筋支会が担当している。

【演武の衣装と道具・楽曲】

衣装・道具については、槍とか長刀を扱う衣装で刀を扱う衣装はそれぞれ違い、また一番棒の衣装も違う。共通点は襦袢と緋・白のズボンに脚絆のいでたちで、ワラジに黒足袋をして、紫の襷をしめる。1 番棒は紫の入巻にレンコナー、槍と長刀の場合は紅型のフロシキを付ける。按司が着けたレンコナーとなる。

各衣装は各地域の保存会が保管しているが棒や刀類は練習中や本番中によく折れたり破損したりするので保存会が修理したり新調したりする。また演武した本人が修理したり新調したりする。女子の衣装も集落の保存会が集落ごとに保管している。

棒（ボウ）の材料は以前、デイゴ等を利用していたが脆いため、現在はほとんど杉材で、なかにはキャンギ（イヌマキ）で作られたものがいくつかある。棒の演技は銅羅鐘、太鼓、ホラ貝（ブラ）の音で行う。演奏者は保存会の先輩が行う。腕棒（ウディボー）についても銅羅鐘とホラ貝で行う。銅羅鐘と太鼓で入場しホラ貝の合図で打ち合いが始まり、ホラ貝の合図で終了し退場等の動作がある。腕棒もドラとブラで開始終了、退場がある。楽曲については、戦前戦後復帰後もとくに変化はみられないという。

【行事継承の今日的課題】

令和2年と3年については奉納芸能は中止した。公民館では、令和2年度の種子取祭ではコロナウイルス対策として感染対策を実施し、記録作成事業を実施した。奉納芸能は実施出来なかったものの、記録作成事業は県文化振興会の協力があり、島民の祭りに対する熱い思いから、記録作成が出来たことは今後の継承への道筋ができたといえる。

4 竹富町西表島祖納・干立の節祭

西表島の祖納と干立の節祭（シチサイ）は、1991（平成3）年に「西表島の節祭」として国の重要無形民俗文化財に指定されている。両集落を網羅した形で「西表民俗芸能保存会」が組織化されている。

【行事の概要】

節祭は「シチサイ」と呼ばれる。10月の己亥（つちのとい）の日から3日間おこなわれる。行事の目的は豊作への感謝、五穀豊穡、健康と繁栄である。1日目は「シチ」で、翌日の「ユークイ」行事のための諸準備をおこない、身を清め、家を清め、ムラを清めて新しいユウを迎える日である。2日目は「ユークイ」と呼ばれ、奉納芸能が実施される。祖納における上演の場所は前泊の浜にあるクシムリウガンと前泊ウガン御願内にある「船元（フナムトゥ）の御座」である。以下、主に祖納の祭りの流れを中心に記述し、武芸に関する箇所については、干立の事例も参照するようにしたい。

【由来・来歴】

節祭の歌には日本の古い言葉でいう「御座る」とか「弓矢八幡」などが唄われるといい、興味深い民俗芸能でありながら、どのような経路で西表島まで伝来したのかはわからないという。〔沖縄県教育委員会、1981、P45〕

【演武の種類と内容】

「フナムトゥ（船元）の御座」の祭場では、クシムリウガンや前泊ウガンでの祈願祭祀のあとに櫓や棒による奉納演武が行われる。

演武の構成は一番旗が先頭となり、男子の芸人が公民館から「フナムトゥの御座」へ向けて出発する。船子は櫓を持ち二列縦隊で並び、その後方に太鼓打ち、船頭（歌い手）が続く。次に二番旗頭にはミリク行列、アンガマの女子芸人の行列の順である。

一番旗の船子たちは、太鼓打ちが三回打ち終わると、船頭が棒（六尺）を持って、ピョーシのかけ声に合わせて、演武する。舟おろしの「ヤフヌティ（櫓の手：「ピョーン）」ともいう）では、船子の櫓踊りが披露される。「ヤフ」とは櫓の意味で、「手（ティ）」と言っていることから、櫓を使った武芸としての要素を含んでいる。櫓を正眼に構える動作が攻撃であるが、一方膝を立て両手で櫓を頭上に上げるのは年貢を捧げる意味の動作ともいわれるが、別の解釈では攻撃に対する受けの構えとの見方もあるようである。「ヤフヌティ」の演技隊形は、二列に縦列で並び、船を象った形をしているのも特徴的である。歌と太鼓に合わせて、櫓を正眼に構えたり、膝を立て頭上に櫓を上げたりして、前進しながらゆっくりと力強く行われる。歌が終わると、太鼓の連打とともに船子は船頭をまわり元の位置に戻る。この隊形を三回繰り返す。

その後、ミリク行列、アンガマ行列のあとに、フナムトゥの祭場において、奉納舞踊やミリクの舞いが披露され、ユークイの舟漕ぎ競漕が行われる。これが終了すると「浜の芸能」として狂言が披露される。

次に棒術が行われる。棒術は「棒踊り」と「棒芸」と呼ばれる。棒術の演武は、鎌と棒（ガヒヤー）、二人棒、三人棒、五人棒がある。青年、小学生、中学生、郷友会も参加して勇壮に演じられる。銅鑼・太鼓・笛の伴奏に合わせて演武する。

右記のヤフヌティ（櫂の手）は干立においても行われる。その点は同様であるが、ここでは舟子（男子）の他に、アンガーとミルクヌファ（ともに婦人）がそれぞれ櫂を持ち二列の隊形でヤフヌティを演じるもので、女性が参加する点が異なっている。また、棒も披露されるが、シーシャン棒（獅子棒）や、一対二で打ち合う三人棒が行われる。この棒には小学生や中学生も多く参加するという。〔比嘉、1991、P64～78 及び P134～142〕



写真3-5-5 棒の演武〔西表島祖納〕

【演武の組織構成・稽古・継承方法】

節祭を構成する演者は以下のとおり。旗頭持ち二人（40歳前後の力の強い者）、舟頭二人（49歳を迎えた者）、舟子若干人（櫂踊り、爬龍船の船子その他）、太鼓打二人（櫂踊りの時の太鼓役）、ミリク（弥勒）役一人（49歳を迎えた繁盛家）、お供若干人（20歳以下の乙女）、フダミチ二人（50歳前後の婦人）、お供（50歳前後の婦人）、太鼓打二人（50歳前後の婦人）の以上である。〔沖縄県教育委員会、1981、P45〕

演武の構成は、前項で記したように、一番旗が先頭となり、男子の芸人が「フナムトウの御座」へ向けて出発する。舟子は櫂を持ち二列縦隊で並び、その後方に太鼓打ち、舟頭（歌い手）が続く。次に二番旗頭にはミリク行列、アンガマの女子芸人の行列の順である。その後、「浜の芸能」として狂言、棒術、アンガマの踊り、獅子舞という流れである。

節祭の主要な組織は公民館の青年部にて実施（70人～80人）される。性別の制限はないが、女性が実施しているところを見たり聞いたりしたことはない。男性であれば、大人子どもかわからず、できることをやる。元の人と移住者の割合は7：3程度。稽古は1週間前ころから公民館の青年部が中心となって実施され、稽古の場所はとくに決まっていない。

【演武の衣装と道具・楽曲】

旗頭持ちは頭に風呂敷を被り、純白の襦袢・コシタを着て、その上から藍型の麻タナチを着る。黒たすき、半帯しての姿である。棒踊りをする船子は風呂敷を被り、純白の襦袢・コシタを着て、黒のたすき・黒帯をしめて櫂を持つ。太鼓打は純白の襦袢・コシタを着て、その上から藍型の麻タナチを着て、片袖ぬぎ、太鼓を持つ。ミリク役はミリクの面をかぶり、黄色の着物に半帯をしめ、白足袋をはき、扇子を持つ。ミリクのお供は模様入りの浴衣に赤い襟をつけて、白カカンを着て、ミリクの両側から袖持ち、穀物の種子の奉納を持ち、その後から銭引きを持って行列をする。

フダミチは黒のスデナ、白のカカンを着て、頭に笠をかぶり、その上から黒い布を被衣し、扇子を持って先頭に立つ。お供は黒のスデナ、白のカカン、水色鉢巻をして、後に長くたらし、紅白のザイを持つ。太鼓打はカンプを結び、水色の鉢巻で顔だけを見せて頭に巻き、黒のスデナに白のカカンを着て、その上から藍型の麻タナチを片袖ぬぎにして太鼓を持って音頭をとる。〔沖縄県教育委員会、1981、P45〕

衣裳・棒、他の用具の管理はすべて個人管理で、衣裳・棒、他の用具の修繕については公民館で修繕ができる人を募って修繕。祭りの2～3日前から実施。棒の材質は木製。

楽器の内容と呼称、各楽器の演奏者数と時代の変化について（戦前、戦後、復帰後など）は、太鼓・笛・三線、演奏者の人数に決まりはない。

【行事継承の今日的課題】

口頭での伝承で公民館には映像が残っていない。個人で撮影している映像はあるが、あくまで個人で管理している。正式なものが残っていないので、型が崩れてきている。

コロナによる3年間は集落内で神事のみの実施してきた。今後は行事の正式な記録をとること（映像等）、指導者の育成が課題としてあげられる。

5 竹富町波照間のムシャーマ

波照間島の島最大の祭事であるムシャーマは、1993（平成5）年に国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択されている。このムシャーマの行事の中には棒術等が演じられる。

【行事の概要】

ムシャーマは、ソーリンと呼ばれる旧盆行事（旧暦7月13日～16日）のなかで、旧7月14日に行われる祖先供養と豊年祈願を結合した祭事である。

波照間島は行政区としては字波照間であるが、字は名石、富嘉、北、南、前の5つの集落（部落）からなり、各集落には集落の会場となる部落会館がある。また全体を総括する中央公民館にあたる公民館は名石に所在する。したがって、ムシャーマの行事では前組（前部落）、西組（名石部落・富嘉部落）、東組（北部落・南部落）という3つの組で組織化される。各部落会館にボーシンカ（棒衆）、テークウ（太鼓打ち）、ブドリクマリ（踊り係）、コンギンシカ（狂言衆）、行列各演目係が置かれるという組織である。棒は中学生から青年が主体となっている。

祭事の場所は「オーセー（オーシャー）」と呼ばれる公民館の前の広場「タカタミチ」である。公民館は昔の番所の跡地でもある。ムシャーマでは、当日の朝、各組ごとに所定の場所に集まり、仮装行列を組んで会場となる公民館へ進む。この行列を「ミチサネ」とか「ミチサネー」といい、様々な芸能や棒術などを披露しながら公民館へ向かう。公民館前の広場でも各組が奉納演舞を行なうという流れである。

【由来・来歴】

ムシャーマは約130年前から実施していると伝えられる。ムシャーマという語は、「ムッサーハー（おもしろいこと）」あるいは「ムシャー（武者あるいは猛者、亡者とも）」にちなむものともいい、明確ではない。

祭事の目的は、祖先供養、五穀豊穡、ミルク神への奉納（奉納芸能）などとされている。ムシャーマは、旧暦7月のソーリン（精霊祭・盆祭）の祖先祭祀行事においてみられるが、このムシャーマはその昔、豊年祈願をするプーリンのエンヌユーニゲー（来年の豊作祈願行事）の仮装行列としてあったものが、プーリンに行われていた綱引きにともなう双方の喧嘩沙汰にともない、綱引きは廃止され、プーリンは御嶽での豊作を祈願する神行事が中心となり、仮装行列はソーリンの行事の中に組み入れられ合併された経緯がある。したがって、ソーリン中のムシャーマは豊作祈願と祖先供養を総合した芸能の祭りとなったものといえる。〔波照間民俗芸能保存会：1982年、P14～18〕

【祭事の構成と種類】

三つの組とは、東組が北部落と南部落、前組が前部落、西組が名石部落と富嘉部落での組み合わせである。各組の列は、先頭と最後の部分の構成は共通で、先頭は大旗（ブーバタ）の旗持ち、次に五穀豊穡を意味する「ミルクヌナーリ（弥勒の実）」とよぶ竹に色紙などを飾るものを持つ者、「ミルク（弥勒）」、ミルクの椅子持ちと袖持ち役の二名の子ども、「五穀の籠」とよぶ竹かごを持つ少女二名、「ミルクンタマー（ミルクの子ども）」とよばれる10人ほどの子どもたち、さらに弥勒節（みるくぶしい）の歌い手と三線、笛がつく。次からは組ごとに、「豆どうま節」や「稲摺節」など、その年々に準備された10ほどの芸能が、それぞれ歌い踊られなが

ら続き、その間に魚釣りの様や、投網を打つ様を演じる者、南洋の土人踊りなども加わる。行列の最後の方は各組とも六尺棒、刀などを手に武術的な演技である棒（ボー）を行う若者たち、太鼓（テーク）の若者たち、一番最後が二頭の獅子（シーシイ）である。

以上の行列が公民館前の広場に到着すると、各組の太鼓、棒が披露され、続いて念仏踊（ニンブチャー）がある。対面での打ち合いなどであるが、本来は体に当てずに寸止めするのが正式とされる。午後から公民館の中庭に特設された舞台で、組ごとに舞踊や芝居の上演が続く。

西組は「一番コンギ」、「シーシン棒」、舞踊「かぎやで風」「世果報節」「祖平花節」、東組は「一番コンギ」、「コームッサー」、舞踊「五月雨節」「安里屋節」、前組は舞踊「崎山ゆんた・みなと一ま」「かしかき」であった。

最後は各組の獅子舞となり、終わると朝と同様に行列を組み、各組はそれぞれ演舞しながら、各会館もしくは所定の場所に戻るとそこで太鼓と棒が演舞されて、すべての祭事が終了となる。

棒の演武について 2024 年の事例で具体的に詳述する。基本的に演武内容は変わらず継承されている。

西組のボー（棒）は、一番「ジンバイ」の笠（カツツア）と長刀、二番「カタナボウ（刀棒）」の刀と長刀、三番「ガツキャ棒」で鎌（ガツキャ）と六尺棒、四番「六尺棒」で六尺棒と長刀、五番「マンチョー」で六尺棒と六尺棒である。東組のボー（棒）は、一番「パナ棒」で笠（カツツア）と長刀、二番「ガツキャ棒」で鎌（ガツキャ）と長刀、三番「ヤラ棒」で長刀と長刀、四番「ボンタマ」で五尺棒と長刀、五番「トゥム棒」で六尺棒と六尺棒である。前組のボー（棒）は、一番「ジンバイ」で長刀と長刀、二番「ガツキャボー棒」で鎌（ガツキャ）と長刀、三番「刀棒」で刀と長刀、四番「六尺棒」で六尺棒と長刀、五番「トゥムボー」で六尺棒と六尺棒である。銅鑼とブラの合図に合わせて行われ、いずれも二人一組による演武である。基本的に演武内容は

組ごとに棒の演武の名称や武具の組み合わせが少しずつ異なるものの、武具の種類は笠、鎌、刀、長刀、五尺棒、六尺棒の六種類である。各組の前者は農民で、後者は武士を表わし、最後の勝負は必ず前者の農民が勝つようになっているという。勇壮で威勢のある掛け声と武芸は、ムラから悪霊や疫病神を追い払う役割をもつとも言われる。〔波照間民俗芸能保存会：1982 年、P70〕



写真3-5-6 棒の演武〔波照間島・東組〕

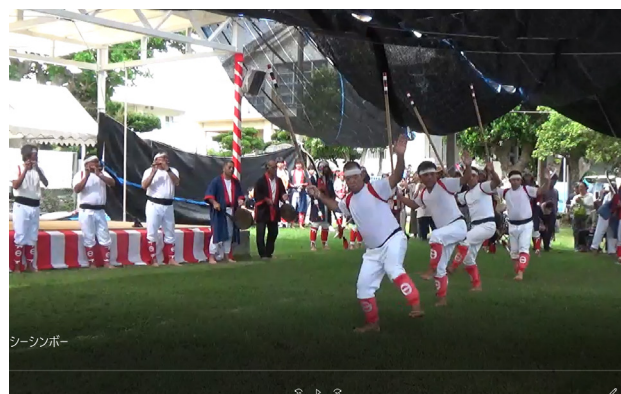


写真3-5-7 シーシン棒〔波照間島・西組〕

「シーシンボー（獅子の舞）」は西組により行われる演目である。これは五尺棒を持って、三組の獅子舞との演舞が行われる演目がある。これの伝来の時期は不明であるが、伝承によると昔、南方諸島からの漂流民が波照間島と新川ムラに伝えたと言われ、波照間島では「シーシンボー（獅子の舞）」、新川ムラでは「ハイヌシマ（南風ぬ島）棒」と称されたという。

ハイヌシマ（南風ぬ島）棒は植物の繊維で作った赤毛のかつらを被り、五尺棒を持って奇異な掛け声を発しつつ、笛、太鼓、銅鑼の囃子で獅子舞の前に演じられる。

波照間島のシーシンボーは新川のそれと共通するところが多かったといわれるが、その演技が複雑で伝授に困難があったので、簡略化されて現在のように踊られているとされる。現在の服装は白ズボンに黒帯、赤たすきをかけ、白はちまきを締める。

演武は 4 名で行う。五尺棒を持って笛のメロディーで打つ銅鑼の拍子に合わせて、「棒とり」→「棒かさり」

→「棒しき」を一つのセットとして、次に「棒かみ」、再び「棒とり」→「棒かさり」→「棒しき」を2セット、次に「棒けり」、そして棒の下打ち、上打ち、回りなどをして、二人での棒の下打ちと上打ちを行い、「棒まわし」や「棒かさり」という型が演じられる。いずれも独特な棒の踊りで、例えば「棒とり」は右手で棒を持ち、右肩後ろに棒をあて、中腰で前かがみに足を後ろに跳ねるように足踏みして、待機する。笛が始まると4歩正面に跳び出し、左手の肘を曲げ、上にひらき右手は肘を曲げ、棒を上立て、頭上で右廻しに一回円を描き、顔は正面に向き、胴は右に向け、一歩正面に跳び腰を深く下すという具合である。また「棒かみ」は飛び跳ねながら棒を頭上で横に両手で持ち、腰を深く下ろし、跳び上がりながら左手の棒をはなし、右手の棒を上立てて両手を上げ、左回りに元に戻って待機するという動きである。〔波照間民俗芸能保存会：1982年、P128～P132〕

【演武の組織と稽古・継承方法】

ムシャーマは「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」、すなわち国選択無形民俗文化財で、すでに「波照間民俗芸能保存会」が組織化されている。

保存会は設立されてはいるものの、現在では人口の減少等にともない、人手不足の状態にあり、公民館の館長・役員にて保存・運営を実施しているのが実情である。

武術の部分は専門の師匠2～3名いる。棒・太鼓については以前、小学校高学年の生徒もやっていたが、中学生がメインで、青年たちも継承している。演武者について、性別の制限はないが、男性がほとんどである。行事自体は20代～30代がメインだが、60代も参加している。練習は2日前くらいから衣装や道具の準備・確認をおこない始めている。

【演武の衣装と道具・楽曲】

棒の衣装は三組ともほとんど共通している。素足のままで、白ズボンに脚絆、白シャツに黒帯を締め、その上から陣羽織に似たボアヌヌにたすきをかける。頭には唐草模様の風呂敷を被り、はちまきを締める。西組では額にカンピをさす。東組と前組はかつてカンピがあったかどうかは不明という。

すべて公民館で保管 公民館予算や寄附を募るなどして予算を捻出している。修繕については、基本的にすべて自分たちで実施している。太鼓・笛・三線の演奏者人数に決まりはない。舞踊で使用する楽曲と、番所あとで最初に演奏する「波照間島節」は決まっているが、演武者や演奏者などは公民館などに任せられている。

【行事継承の今日的課題】

コロナ禍による2年間は神事のみを行い、仮装行列の芸能は実施しなかった。島の人口減少による行事の維持と継承が大きな課題で、3～4年後には島の人口が300人を切るため、行事の維持を懸念している。

公民館長の話によると、とくに島の女性たちからは、ムシャーマは旧盆行事の中日に実施されるために、お盆行事の諸準備をしながら、仮装行列や芸能披露のために練習したり、それらの準備をすることはかなり厳しい状況にあるとの声が寄せられているため、今後3～4年かけてムシャーマ行事のあり方を検討していく予定であるという。

なお、今後に向けては国立劇場おきなわでのムシャーマ公演の依頼もあることから、そうした機会を活かしつつ、関係機関と連携をしながら継承していきたいとしている。

6 与那国町祖納・比川のウガンフトゥティ（豊年祭）

与那国島は南方や中国などの文化の影響を受けるとともに、琉球王国時代の文化を取り入れ、八重山諸島の中でも独特な文化を継承している地域でもある。

ここに対象とする与那国の祭事は、主要なものでもウガンフトゥティ（豊年祭）やスルブディ（お盆の踊り）、

シティブディ（シティ踊り）、シティガン（結願際）などがあり、全体としては「与那国の祭事と芸能」として国の重要無形民俗文化財に指定されている。

芸能全体を支える組織は、あんか^{いむら}（東村）の東区、イリマイ（西村）の西区、ンマナガ（嶋仲）の島仲区、ンディムラ（比川村）の比川区に分かれる。また、本稿に關係する棒術については、東村には東棒座があり、東一組と東二組の二つで構成され、西村には西棒座があり、西一組、西二組、西三組の三つで構成され、嶋仲には嶋仲棒座（西五組）、さらには比川には比川棒座があり、全体では4つの棒座で構成されている。

【行事の概要】

棒術は豊年祭や結願際に披露される。また、棒座師匠とされる「チス」の世代交代の行事などでも披露される。この世代交代の行事は「チムバタイ」と呼ばれている。

本来、ウガンフトウティは、旧暦6月の庚または辛の日（その日と前日と後日の3日間に丑や酉の日が当たらないような日）に行われるが、近年、祖納のウガンフトウティは、祝賀会に多くの人に参加できるように、旧暦6月の日曜日（前日から後日までの3日間に、丑や酉の日が当たらない日）で計画されている。チムバタイは、2年に1度で、4月～6月頃に行われる。日程の詳細はそれぞれ、新しい棒座師匠（チス）が決める。

ウガンフトウティは奉納や披露の目的で、午前中の祈願や綱引き（隔年）が終わると、午後からトヤマウカ^ンの前で踊られる。チムバタイは、新しいチスの家の前で踊られる。

ウガンフトウティ、チムバタイ、どちらも、神様への奉納、披露、お祝いする目的で踊られる。

そのうち、ウガンフトウティ（豊年祭）のような他の公民館との芸能披露を伴う行事は、スブンクトウ（勝負事）とよばれ、互いにティ（技）の内容のすばらしさ、面白さを競いあう。往来は、各部落とも練習内容は互いに公開せず、手の内を秘伝した。時には、変装して他の村の練習場に忍び込みティを盗むこともあった。そのため、棒座では、シクミ棒とよばれる練習用のにせの棒とスニティ棒とよばれる本番用の棒踊を準備していた。現在は、本番用のみ練習している。

【由来・来歴】

与那国の棒術は、およそ320年以上の歴史を持っている。乾隆年間末期の西暦1700年頃、首里出身の棒術者、幸地氏が与那国島に漂着した。彼は与那国島に住みつくなり、島の娘と結婚し8名の子宝に恵まれた。そのうち7名の子息たちは怪童といわれ、あまりにも激しい気性と怪力の持ち主たちだったので、彼は棒術の伝授の後の危険性を恐れ、ひとり娘にひそかに棒術を伝授した。

娘が年頃になり、東迎家の先祖にあたる満名と結婚する際に、棒踊道具一式を持たせてやった。娘はその道具を用いて自分の息子4人に棒術を教えたのが始まりである。その棒踊道具は、東迎家で老朽するまで永らく伝えられていた。

また一説に、幸地氏が東迎家の孫に伝授したのが、始まりであるとも言う。

その頃、与那国島は役人が支配しており、その統制と抑圧はあまりにも厳しく、島民たちが棒術やその他の技を練ることを徹底的に取り締まったようである。そのような役人の抑制下にありながら、島の人たちは一層自分を守るにふさわし護身術として、いろいろ創意工夫して、六尺棒、三尺棒、薙刀、ティンバイ、イララ（鎌）棒、ダング（櫂）棒、マヌムヌ棒、ハサン棒など数多くの棒術をあみだした。

その背景には、並々ならぬ辛苦があったことが伺える。役人の目を誤魔化すために、棒術をフィ（笛）やンヌン（太鼓）、ドラガニン（どら鉦）の音に合わせて踊りとしておこなうようになり、島の諸行事の際には演技として役人たちを楽しませるようにしたのであろう。棒術本来の目的は、あくまでも身を守るためのものであったことは今更言うまでもないが、時に農具や漁具その他の器物を巧みに利用して棒術に取り入れ、練習を続けたのである。それ以来、与那国島全島（祖納東、祖納西、嶋仲、比川）へ棒踊が広く伝えられるようになった。

また、時代の進展とともに、他の島から取り入れたものやそれぞれの部落で創作されたものがある。明治末期以降創立された久部良集落では、棒踊りをはじめ与那国伝来の民俗芸能は数少ないが、戦前から戦後にかけての一時期、他の部落からの移住者によって、棒踊りが伝授され、行事で演じられたことがある。

【演武の種類と内容】

棒（ぼう）は、方言で「ブ」と言う。演武は型の演武や対面での打ち合い等がある。

西村の棒の演武の種類としては、①ミティアギ、②六尺一人棒、③六尺タイティ棒、④ンビムディ棒、⑤ダング棒、⑥六尺イララ棒、⑦イビ棒、⑧ウブ棒、⑨ハサン棒、⑩ティンバイ、⑪三尺三人棒、⑫マーヌムヌ棒、⑬六尺四人棒、⑭五人棒、⑮チチヌ棒、⑯ンビチ棒など 16 種類がある。

東村では①ミティアギ、②六尺一人棒、③イララ六尺棒、④ティンバイ、⑤三尺二人棒、⑥六尺二人棒、⑦ペラ棒、⑧イララ三尺棒、⑨サグ棒引きティニ人、⑩サグ棒イララ、⑪ンビフティ棒、⑫三尺三人棒、⑬ハディリ棒、⑭マラウティ棒、⑮六尺四人棒、⑯マーヌムヌ棒（マンナ棒）、⑰五人棒、⑱ブリ棒、⑲チチヌ棒、⑳ンビチ棒の 20 種類と多い。

嶋仲では①ミティアギ、②砂かけ棒、③六尺イララ棒、④ティンバイ、⑤三尺二人棒、⑥六尺二人棒、⑦六尺薙刀、⑧三尺イララ棒、⑨三尺三人棒、⑩マーヌムヌ棒、⑪六尺四人棒、⑫五人棒、⑬三尺五人棒、⑭チチヌ棒、⑮ンビチ棒の 15 種類である。

比川では、①ミティアギ、②六尺一人棒、③六尺イララ棒、④ティンバイ、⑤六尺二人棒、⑥三尺イララ棒、⑦サグ棒引きティニ人、⑧サグ棒イララ、⑨三尺三人棒、⑩マーヌムヌ棒、⑪六尺四人棒、⑫四人組、⑬五人棒、⑭五人棒、マティ棒、六尺イララ棒の連続した棒踊、⑮チチヌ棒、⑯ンビチ棒の 16 種類である。



写真3-5-8 棒の演武：イララ六尺（嶋仲棒座）〔与那国町教育委員会所蔵〕



写真3-5-9 棒の演舞：マンナ棒（東棒座）〔与那国町教育委員会所蔵〕

ウガンフトウティ、チムバタイ、どちらも、神様への奉納、披露、お祝いの意味があることから、ウガンフトウティでは、開演を告げる「座ならし」、六尺一人が登場する「ミティアギ」と他全出演者が揃う「スナイ」のあとに 3 演目ほど棒踊りを行う。なお、豊年に・豊穰に関係するイララ（鎌）を使った踊りは定番となっている。イクミでは、1 点踊っている。

鳴り物のンヌン（太鼓）は 5 名で、このうち真ん中に立つ人が音をとっている。カニン（ドラ）に 1 名、フィ（笛）に 1 名である。

多くの棒踊りには各部落共通する演目が多いが、棒のティ（うつ手）は多少異なる。それは当時の指導者がそのティをいろいろと加え、他と面白さを競ってきたためだと考えられる。

天地を轟かすようなフィやンヌン、ドラガニンの音に合わせて、舞台狭しと演じる勇壮な棒踊りは、島人をして出演者、観客とも血湧き肉躍らせるものがある。今では与那国島の民俗芸能の大きな演目の一つである。

【演武の組織と稽古・継承方法】

各棒座が保有する棒踊りは、その棒座のみ特化している。東村には東棒座があり、東一組と東二組の二つで構成され、西村には西棒座があり、西一組、西二組、西三組の三つで構成され、さらに嶋仲には嶋仲棒座で、西五組となっている。比川は比川棒座である。

西棒座では男性のみで、年齢の制限は特にないが、「チス（師匠）」を経験すると「コモンウヤ（顧問）」の立場にあがる。祖納西地域（西一組、西二組、西三組）の出身であれば、他の地域に住んでいても西棒座に所属することができる。

東村では男性のみで、年齢の制限は特にないが、「チス（師匠）」を経験すると、「コモンウヤ（顧問）」の立場にあがる。東の地域の出身であれば、他の地域に引っ越しても東棒座に所属することが出来る。また、他の地域の出身であっても、東地域に住んでいる人は東棒座に所属することができる。

嶋仲では男性のみで、年齢の制限は特にない。また、嶋仲（西五組）の地域の出身であれば、他の地域に引っ越しても嶋仲棒座に所属することが出来る。また、他の地域の出身であっても、嶋仲地域（西五組）に住んでいる人は嶋仲棒座に所属することができる。

比川棒座に会計はなく、支出があれば公民館の会計から支払われる。棒座の1年の活動は、主に豊年祭（ウガンフトゥティ）の10日前から始まる練習である。棒座には、「チス」と呼ばれる座の師匠が置かれる。

〔西 村〕 武術の部分に関しては専門の師匠はいないが、その踊りについては経験者が教えている。かつては各家庭はいずれかの座に属していた（棒座の他に、踊座、組踊座、狂言座、旗座などがある）。そのため、ここでは棒座に携わっていた家庭を挙げると、東迎家、請花家、東浜家、外間家、小嶺家、新嵩家、杉本家、徳吉家、入慶田本家、東崎原家である。現在は、棒座への参加に家のルーツを問わない。

〔東 村〕 歴代棒座師匠として、外間守一郎、大川哲明、前黒島章、金城信利、前登野城充、嶋間信助、宮良正一、請舛正雄、久部良竹仁、祖納英文などの方（※順番は年代に関係しない。また、聞き取り調査によるものなので再確認必要）がいた。

〔嶋 仲〕 歴代棒座の師匠には、稲蔵国象、益良作、嶋間秀司、田島芳宏、田島政之、前外間均、田島永信、慶田嵩正弘、与那覇昇、前外間功、田島寛二、横田秀雄、上原光秀、上原信孝、大島馨、田島昇、与那覇徳三、与那覇義昭（※公民館に残された記録を参考にしたが、記録されていない人もいる可能性有）などの方がいた。与那国中学校で行われる郷土学習の「棒座コース」を、他の棒座（東棒座、嶋仲棒座）と持ち回りで教えている。以前は2年ずつ担当していたが、今は2年交替である。

各家庭はいずれかの座に属して代々受け継がれてきたため、棒踊を踊る家庭も決まっていたが、最近は生活様式の変容や特に後継者不足のため、これまでの強固な座の体制は弱まっている。現在、西棒座においては、「チス」という師匠を1名置き、その下に「ナガチス」を1名以上置いている。最近は会計係も置いている。以前は、座に所属する各家庭から集金して、年間の支出に充てていたが、現在は報酬のある草刈りの事業を受けて、収入を得ている。

〔西 村〕 稽古は、ウガンフトゥティの場合、まず棒座の会合を開き、今年は誰がどの演武をするかを決め、「コモンウヤ（顧問）」の了承を得る。練習は本番の二週間前から開始し、19時から21時ごろまで行う。チムバタイの棒踊は練習を行っていない。チスの家や公民館の庭など、屋外で練習している。

〔東 村〕 ウガンフトゥティでは、およそ2週間前から練習を始めている。18時半から1時間半程度練習している。練習の内容はチスが決める。本番の二日前に、踊り座（女性の舞踊の座）と合同でリハーサルを行っている。本番だと、身内に不幸があった人は、トヤマウカンに行けないため、その人達も棒や踊りを見られるように、また練習もかねて、合同でリハーサルを行う。練習場所は公民館の庭など屋外。

〔嶋 仲〕ウガンフトゥティの練習日程は、その年のチスが決めているため一概ではないが、当日のおよそ2週間前から始め、夜に2時間程度練習を行っている。練習の内容もチスが決めている。チムバタイで踊られる棒の練習についても、ウガンフトゥティと同様、チスが決めている。公民館の駐車場など、屋外で練習する。

〔比 川〕専門の師匠はおらず、その踊りの経験者が教えている。比川小学校の児童に、学芸会での発表を目的に教えている。小学校の児童には、男女関係なく教えており、人数が不足している場合は、比川小学校の先生に太鼓役をしてもらっている。入米蔵 茂夫さん 男性のみで、年齢の条件は特にない。他の地域出身であっても、比川地域在住であれば、参加することが出来る。ウガンフトゥティの10日前から、20時から21時を目処に練習を行っている。公民館の庭など、屋外で練習する。

なお、伝承によると、ウガンフトゥティ（豊年祭）のような他の公民館との芸能披露を伴う行事は、スブングトゥ（勝負事）とよばれ、互いにティ（技）の内容のすばらしさ、面白さを競いあう。往来は、各部落とも練習内容は互いに公開せず、手の内を秘伝した。時には、変装して他の村の練習場に忍び込みティを盗むこともあった。そのため、棒座では、シクミ棒とよばれる練習用のにせの棒とスニティ棒とよばれる本番用の棒踊を準備していた。現在は、本番用のみ練習しているという。

【演武の衣装と道具・楽曲】

〔西 村〕棒踊出演者の「衣装」を方言で、「ンナニ」という。踊りによっては一部特殊な衣装があるが、ほとんど同じ衣装を着用する。衣装は、それぞれ①サシマタ、②頭巾、③鉢巻、④たすき、⑤脚絆、⑥白の襦袢上下、⑦袴、⑧トサカなどである。

上は長袖の白いシャツ、下も城のズボンを着用し、ミンサー帯で絞め、たすきを掛ける。最近は白いシャツの代わりに、襦袢を着ている。頭は頭巾の上からサシマタとよぶ冠を掛け鉢巻を結ぶ。脚は黒の脚絆をつけ、履物は履かず素足で踊る。マーンムヌ棒の野武士は、頭をアグイ（クロツグの黒い繊維）で覆う。最近は、ティンバイ役が柄のあるズボンを着用していたり、薙刀役が袴を着用するようになっている。

鳴り物の出演者については、フィ、ンヌン、カニンの出演者は全員ドウタティ（与那国絃）をミンサー帯で絞め、数本の藁か花織シダディ（てぬぐい）を鉢巻にしていた。最近は、白いタオルを捻じり鉢巻に用いる場合が多い。

次に道具類について、棒踊の道具は、①三尺棒、②六尺棒、③イララ（鎌）、④ナギナタ（長刀）、⑤ティンバイの小刀、⑥笠、⑦ダング（櫓）、⑧ハサン（先が二股になったはさみ）などである。鳴り物の道具は、①ンヌン（太鼓）、②チムンク（太鼓のばち）、③カニン（ドラ鉦）、④フィ（笛）である。

衣装は個人で持っており、サシマタ、トサカと道具一式はチスの家で保管している。

衣装の変化としては、長袖の白いシャツと白い長ズボンが、襦袢の上下に変わっている。その他、ティンバイの薙刀が袴をきるようになった。衣装や道具は、古くなったり、傷んで修理が必要な場合は、個人のものは個人、棒座のものは棒座で修繕している。

棒は、昔はヒロウ（クバ）の幹の中心部分を使って作っていて、ハスノハギリ（トウガヌタ、スガヌタ）やデイゴ（ディクイ）を使っている。現在は石垣島のスポーツ店から購入している薙刀（木と竹）を使用している。折れたり、替えがなくなるまで使っている。チムンク（太鼓のばち）はオオハマボウ（ドウニンパ、ドウヌンパ、ドウナンパ）を使う。

〔東 村〕棒踊出演者の「衣装」を方言で、「ンナニ」とうのは東村と同様である。踊りによっては一部特殊な衣装があるが、ほとんど同じ衣装を着用する。衣装は西村と同様である。上は長袖の白いシャ

ツ、下も城のズボンを着用し、ミンサー帯で絞め、たすきを掛ける。最近は白いシャツの代わりに、襦袢を着ている。頭は頭巾の上からサシマタとよぶ冠を掛け鉢巻を結ぶ。脚は黒の脚絆をつけ、履物は履かず素足で踊る。マヌムヌ棒の野武士は、頭をアグイ（クロツグの黒い繊維）で覆う。最近は、ティンバイ役が柄のあるズボンを着用したり、薙刀役が袴を着用するようになっている。棒踊りの道具は、①三尺棒、②六尺棒、③イララ（鎌）、④ナギナタ（長刀）、⑤ティンバイの小刀、⑥笠などである。鳴り物の道具は西村と同様。

衣装は個人で持っているが、棒座も何組があるため、衣装を持っていない人は個人や棒座から借用する。衣装の中でも、サシマタ、トサカ、たすきは棒座が保管している。道具は、棒座が公民館で保管している。その他、衣装や道具は、個人のものは個人、棒座のものは棒座で修繕しており、道具の材料や新規の購入などは西村と同じである。

〔嶋 仲〕 棒踊出演者の衣装の方言で「ンナニ」というのも同様で、踊りによっては一部特殊な衣装があるが、ほとんど同じ衣装を着用する。踊り衣装は道具、鳴り物の道具類も西村・東村と同じである。

なお、嶋仲では装の変化として、以前は長袖の白いシャツと白い長ズボンを着ていたが、今は襦袢の上下に変わっている。その他、ティンバイ役が柄のあるズボンを着用したり、薙刀役が袴を着用するように変化している。衣装の変化は見栄え良くするためである。

衣装は個人で持っているが、棒座にも何組があるため、衣装を持っていない人は個人や棒座から借用する。衣装の中でも、サシマタやトサカなどは棒座が保管している。道具は棒座が公民館で保管している。衣装や道具は、個人のものは個人、棒座のものは棒座で修繕している点などは他と同様である。棒は現在は、石垣島のスポーツ店から購入しているが、昔はビロウ（クバ）の幹の中心部分を使って作っていたということで他と同じである。

〔比 川〕 棒踊り衣装や道具、鳴り物の道具類は東村嶋や仲と同じである。衣装は個人で持っていて、衣装がない人には貸している。以前は、衣装に白いYシャツと白いズボンを着ていたが、今は肌襦袢変わった。道具は公民館に置いている。衣装が裂けた場合の裁縫や購入は個人で行い、道具の修繕は棒座で行う。道具の修繕には、薙刀に鶏の羽をつけたり、牛の皮に酒をよく塗して、ンヌン（太鼓）の張り替えなどを行う。棒は、なかなか折れることがないので、どのように購入しているかわからない。

西村と東村、それに比川では、それぞれ楽曲はとくに変化はないとされるが、嶋仲では音をあげる回数などが変わっているといわれる。比川ではンヌン（太鼓）の人数を、以前は4名だったが他の地域（祖納）に合わせて5名にした。カニン（ドラ）が1名。フィ（笛）が1名。以前は、フィ（笛）の人を他の地域（祖納）からよび、比川の楽曲で演奏してもらっていたが、今は比川に笛の演奏者がいる。ンヌン（太鼓）やカニン（ドラ）は以前から変化なし。

【行事継承の今日的課題】

全体としては、ウガンフトウティは、コロナの流行により祝賀会が行われず踊らなかった時はあったが、特に影響はなかったという。

東村の課題としては、要員不足のため、若い年齢の人たちが経験値があまりないままでチスになっていくのではないかと懸念している。また、鳴り物のンヌン（太鼓）はその張り替えで牛皮を買うが、一頭分（1枚）で10万円程度と値が高いということがある。一頭分（1枚）では六個の太鼓の両面を張り替えることが出来る分量であるが、経費がかかるという。嶋仲でも同様に、道具や衣装購入の費用などが課題とされている。

比川では要員不足であることが近年の課題となっているといい、若者が少なく、20代が0人、30代が1名、40代が2名という現状で、棒踊りの存続が厳しいとされている。

著：萩尾 俊章